

末日聖徒イエス・キリスト教会

# 聖徒の道

1986  
5



# 聖徒の道

## 1986年5月号

本書は「エンサイン」「ニューエラ」「フレンド」の記事を抜粋した、末日聖徒イエス・キリスト教会の公式刊行物です。

大管長会：エズラ・タフト・ベンソン、ゴードン・B・ヒンクレイ、トーマス・S・モンソン

十二使徒定員会：マリオン・G・ロムニー、ハワード・W・ハンター、ボイド・K・バックナー、マービン・J・アシュトン、L・トム・ペリー、デビッド・B・ヘイト、ジェームズ・E・ファウスト、ニール・A・マックスウェル、ラッセル・M・ネルソン、ダリン・H・オックス、M・ラッセル・バラード

顧問：カーロス・E・エイシー、レックス・D・ピネガー、ジョージ・P・リー、ジェームズ・M・パラモア

編集長：カーロス・E・エイシー

教会機関誌ディレクター：ウェイン・B・リン

編集主幹：ラリー・A・ヒラー

編集副主幹：デビッド・ミッチェル

子供の頁編集：ロイス・リチャードソン

レイアウト/デザイン：メアリー・A・ホドソン、C・キンボール・ボット

聖徒の道 1986年5月号第30巻第5号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会

〒106東京都港区南麻布5-10-30

電話 03-440-2351

印刷所 株式会社 精興社

定価 年間予約/海外予約2,200円(送料共)

半年予約1,100円(送料共)

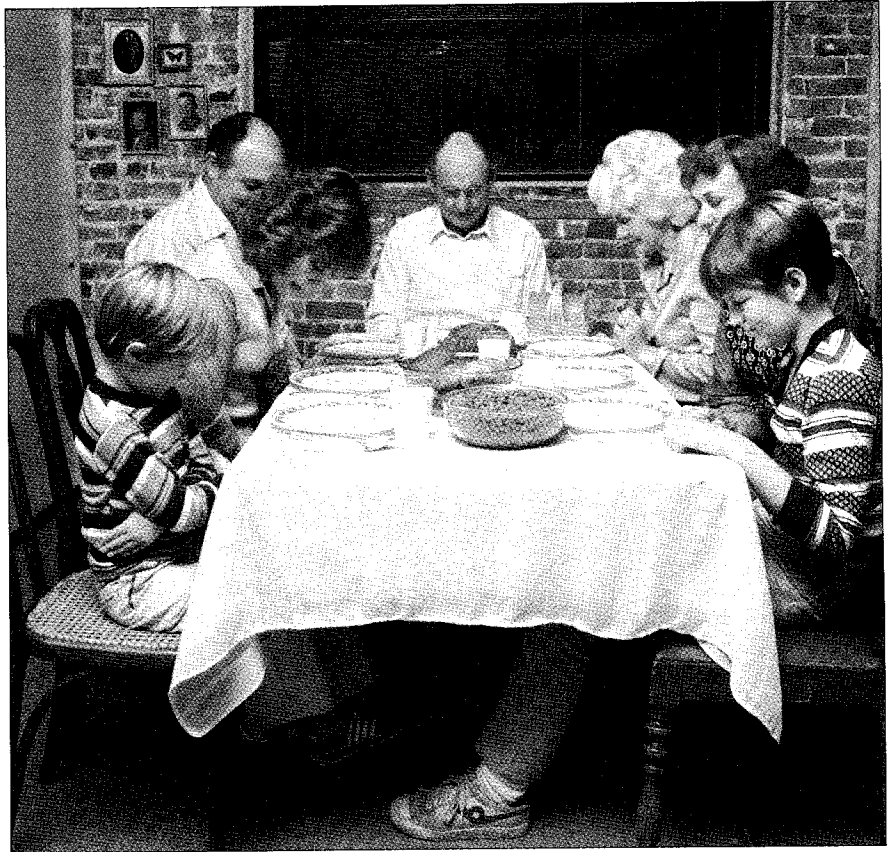
普通号150円, 大会号(1,7月号)350円

International Magazines PBMA045AJA

Printed in Tokyo, Japan.

Copyright ©1986 by the Corporation of the President of the Church of Jesus Christ of Latter-day Saints. All rights reserved.

●定期購読は、「聖徒の道」予約申し込み用紙でお申し込みになるか、または現金書留か振替(口座名/末日聖徒イエス・キリスト教会 渋谷ブックセンター 振替口座番号/東京0-41512)にてご送金いただければ、直接郵送致します。●「聖徒の道」のお申し込み先……〒150東京都渋谷区桜丘町28-8/末日聖徒イエス・キリスト教会 渋谷ブックセンター/☎03-464-1617●「聖徒の道」についての配送のお問い合わせ……〒194東京都町田市小川1704-1/末日聖徒イエス・キリスト教会 資材管理部配送センター/☎0427-96-2820



### ●—もくじ

表紙：ジョセフ・スミスとオリヴァ・カウドリにアロン神権を授ける復活したバプテスマのヨハネ

家庭を天国に	トーマス・S・モンソン	1
準備はできていました	ニーナ・ハル	5
才能を生かす	バーノン、パーサ・プロクター	8
まず百分の一を納めなさい	メッティ・ハンセン・ロー	10
質疑応答(「完全なる福音」の意味)	ダニエル・H・ラドロー	12
(神はひとりだけで霊のお方か)	ロイ・W・ドクシー	15
遅すぎることはない	ジョン・K・カーマック	18
救いの歌	ゲリー・ローレン・マカリスト	21
聖職者の権能	ビクター・W・マシューズ	22
手を伸ばして登りなさい	ダリン・H・オックス	23
フォト・アンド・ポエム「証」		表3
ローカルページ(地域会長会メッセージ、チャーチニュース、各地のたより)		
子供のページ(別冊付録)		
母の日のおくりもの		1
ふえの名人	ジョイス・B・ベイリー	2
母の日のおりょうり		6
森のくだものやさん		7

# 家庭を 天国に

第二副管長

トーマス・S・モンソン



**家**庭は正しい生活の基盤であり、他のいかなるものも、家庭に代わってその大切な役割を果たすことはできません。家庭は、愛と犠牲、尊敬によって築かれます。私たちは家を家庭にすることができます。そして、そこが家族の避け所となると、家庭は天国になるのです。住む家に大小があるように、家族の人数も家庭によって様々です。年老いた夫婦もいれば、若い夫婦もいます。また、幸福な状態の家庭もあれば、倦怠や冷淡、崩壊などの徴候が現われている家庭もあることでしょう。

自分の家族を築くために備えている人も、現在の家庭をいかにして天国に近づけるか考えている人も、主の教えから学ぶことができます。主は熟練した建築者であられ、私たちに家を築く方法を教えてくださいましたからです。

イエスは、今では聖地として尊ばれている町や村のほこりっぽい道を歩き、美しいガリラヤ湖のほとりで弟子たちを教えたとき、人々にとって最もわかりやすい言葉で、たとえ話をよくされました。

そして、聴く人々の生活に関連づけて、家を築く話をしばしば取りあげておられます。

主はこう言われました。「おおよそ……内わで分れ争う町や家は立ち行かない。」(マタイ12:25) また後に、こう告げておられます。「わが家は秩序の家なればなり。」(教義と聖約 132:18)

1832年12月17日、オハイオ州カートランドで予言者ジョセフ・スミスを通して与えられた啓示の中で、主は次のように勧告しておられます。「汝ら組織して必要なる物をことごとく調べよ。そして、祈りの家、断食の家、信仰の家、学問の家、栄光の家、秩序の家、神の家なる一つの家を建つべし。」(教義と聖約88:119)

正しくまた賢明に家を建てるうえで、これ以上ふさわしい青写真がどこにあるのでしょうか。この家は、マタイの福音書にある建築基準を満たして、まさに「岩の上」に建てられた家となり、苦難に満ちた世の中であって、至る所で逆境という「雨」や迫害という「洪水」、あるいは不信仰という「風」に襲われても、決して

倒れることがないのです。(マタイ7:24-25参照)

中には、疑問をもつ人がいるかもしれませんが。「でもその啓示は、神殿を建設するために与えられた指針のほずです。今の私たちにもあてはまるのですか。」

私は次のようにお答えします。「使徒パウロは、こう宣言したではありませんか。『あなたがたは神の宮であって、神の御霊が自分のうちに宿っていることを知らないのか。』(Iコリント3:16)」

家族を、すなわち家庭を築くとき、主に建築監督を務めていただきましょう。そして私たち一人一人は、建築の最も重要な部分の責任者になります。つまり全員が建築家になるのです。そこで、この建築に着手するにあたり、私は神からの指針や人生の教訓、それに考慮すべき事柄について、皆さんにお話ししたいと思います。

第1に、ひざまずいて祈ることです。ダビデの子で、知恵に満ちたイスラエルの王ソロモンは、次のように述べています。「心をつくして主に信頼せよ、自分

家族と一緒に祈る姿ほど、この世の中で  
美しい光景はありません。よく聞く格言  
に、「共に祈る家族は、共に永らえる」  
とありますが、これは真理なのです。

の知識にたよってはならない。すべての道で主を認めよ、そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる。」(箴言3：5-6)

ニーファイの弟ヤコブは言いました。「心を堅く保って神を頼み、固く信じて神に祈れ。」(モルモン経ヤコブ3：1) この靈感あふれる勧告は、水晶のように澄んだ水が乾ききった大地を潤すように、現代の私たちの心にしみとおっていきます。

ある著名なアメリカ人の判事が、このような質問を受けました。「世界の国々に住む市民として、私たちはどうしたら犯罪や違法行為を減らし、個人の生活と国家に、安らぎや平和をもたらすことができるでしょうか。」判事はじっくりと考えて答えました。「家族の祈りという昔の習慣を取り戻せばよいかと思えます。」

私たち主の民は、家族の祈りが<sup>た</sup>廢れた習慣でないことに感謝しようではありませんか。家族と一緒に祈る姿ほど、この世の中で美しい光景はありません。よく聞く格言に、「共に祈る家族は、共に永らえる」とありますが、これは真理なのです。

主は私たちに、家族の祈りをするように命じておられます。「汝らの妻子が祝福を受くるよう、たえずわが名によりて家族の祈りを御父に捧げよ。」(III ニーファイ18：21)

ここで、典型的な末日聖徒の家族が主に祈りを捧げている様子をのぞいてみましょう。父親と母親、それに子供たち全員が、ひざまずいて頭を垂れ、目を閉じています。愛と一致と平安という快い雰囲気、家庭を包んでいます。幼い息子

がこう祈ります。「お父さんが正しい行ないをして、戒めを守れますように。」それを聞いた父親は、大切な息子の祈りに応えることがむずかしいと感じるでしょうか。やさしい母親が十代の娘のためにこう祈ります。「導きを受けて正しい伴侶を選べますように、また神殿結婚に備えられますように。」心から愛する母親の謙遜な祈りを聞いた娘は、それを尊ぶように努力するのではないのでしょうか。あるいは家族全員が一緒になって熱心にこう祈ります。「立派な息子たちがふさわしい生活をし、やがて時が来たら、伝道地で主の代理人として働く召しを受けられますように。」それを聞いた息子たちは、宣教師になろうという強い願望を抱いた青年に成長していくのではないのでしょうか。

家族の祈りと個人の祈りは、神への信仰と信頼をもって行ないましょう。もし、常に祈りなさいという勧告になかなか従えない人がいるなら、今こそ従うときです。また、祈りは肉体的な弱さの表われだと思っている人がいるなら、次の言葉を味わってください。「ひざまずくときほど、人が大きく見えることはない。」

ひざまずいて祈ってください。

第2に、進んで奉仕することです。

私たちの模範として、主の生涯に目を向けてみましょう。人々に導きと恵みを施されたイエスの生涯は、善の光を投げかけるサーチライトのようでした。その光に照らされて、足の悪い人は歩けるようになり、目の見えない人は見えるようになり、耳の聞こえない人は聞こえるようになり、死人はよみがえったのです。

主が語られたたとえ話には、力があり





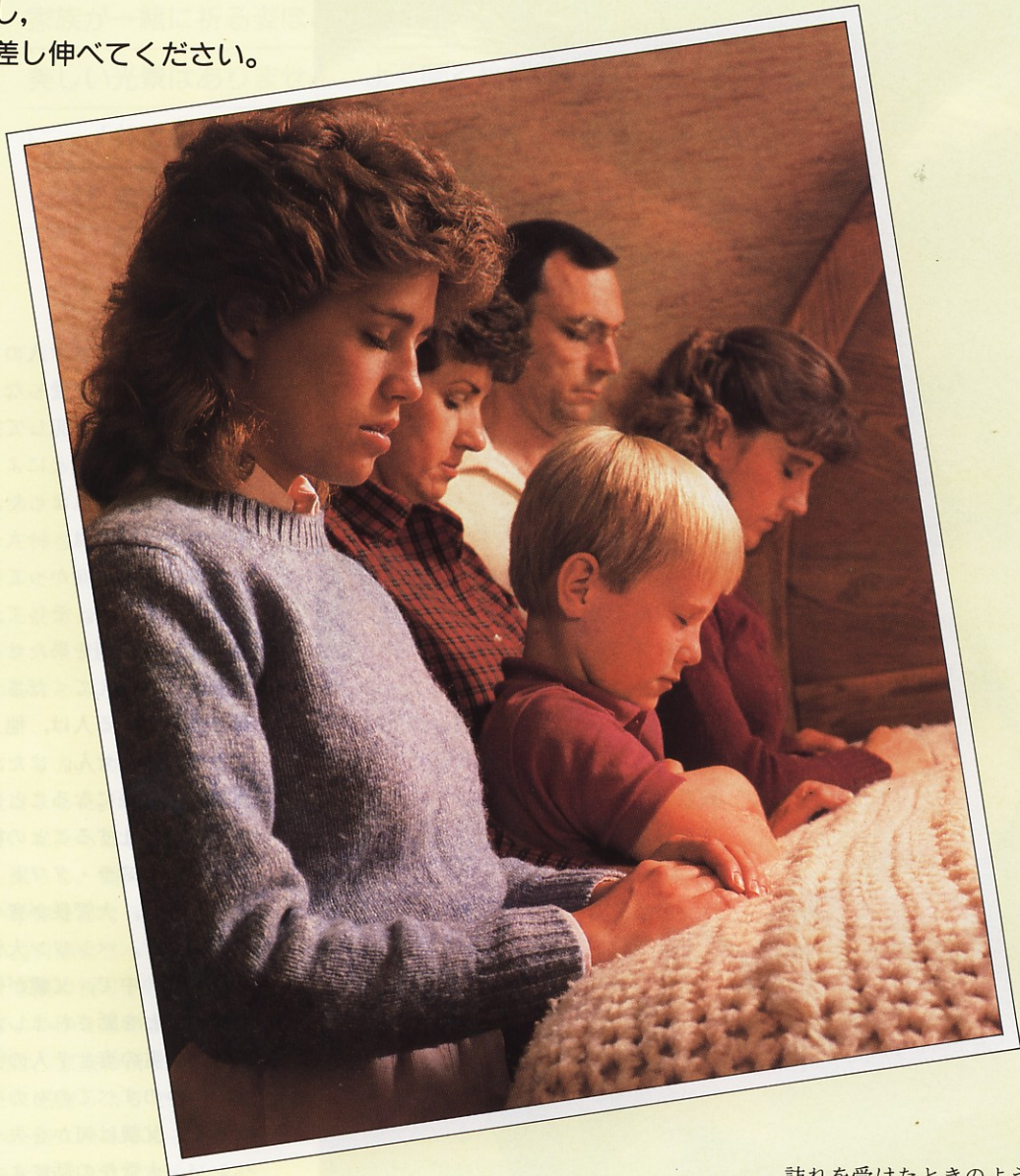
ます。よきサマリヤ人のたとえ話では、「あなたの隣人を愛しなさい」と教えられました。姦淫を犯して捕らえられた女をやさしく扱うことにより、憐れみ深い思いやりを示されました。また、タラントのたとえ話では、一人一人がみずからを高め、完成に向かって努力するように教えられました。そして、永遠の家族を築くという役割を果たせるように、私たちを十分に備えてくださったのです。自分を高めている人は、他人をあてにすることがありません。また、奉仕している人は、不機嫌になることがありません。

進んで奉仕することの模範は、私たちの指導者エズラ・タフト・ベンソン大管長の生活と、大管長が育った家庭の中に見られます。ベンソン大管長は教会幹部への説教の中で、父親が伝道に召されたときのことを話されました。そのとき父親は、身重の妻と7人の子供を残し、農場やほかのすべてのものを置いて出かけました。父親は何かを失ったのでしょうか。ベンソン大管長の話によれば、母親は子供たちを台所のテーブルの周りに集め、ランプの揺らめく光の下で、父親からの手紙を読んで聞かせました。しかし、あふれ出る涙をぬぐうために、母親の読む声は何度も途切れたそうです。その結果、どうなったのでしょうか。子供たち全員が、伝道に出ました。一人一人が進んで奉仕したのです。

第3に、救いの手を差し伸べることです。

昨年の暮れ近くに、大管長会はキリストの群れから迷い出た人々に注意を向け、「教会から遠のいている人々への呼びかけ」と題するメッセージを発表しました。

ひざまずいて祈り、  
進んで奉仕し、  
救いの手を差し伸べてください。



その中で、大管長会は次のように述べています。「私たちは教会員に対して、自分に罪を犯した人々を赦すように勧告します。また教会に活発でなくなり、他の人々に対して批判的になっている人々には、『立ち返りなさい。そして主が備えられたテーブルにつき、聖徒の交わりという甘く、心を満たしてくれる木の实を再び味わいなさい』と呼びかけるものです。私たちは、戻りたいと望みながらも、きまり悪さを感じてそうできない人々が多くいると確信しています。しかし、そ

のような人々に申し上げたいと思います。私たちは両手を広げて皆さんを歓迎し、喜んでお助けしたいと願っているのです。」

(1985年12月23日付の大管長会からの手紙)

ひざまずいて祈り、進んで奉仕し、救いの手を差し伸べてください。それぞれの段階が神の青写真の大切な1枚であり、私たちはそれに従うことによって、家を家庭に、家庭を天国に築きあげることができるのです。

技術を磨き、近道をせず、神の青写真に従って建築を進めましょう。そうすれば、古代の宮居を建てたソロモンが主の

訪れを受けたときのように、私たちも主からこう告げられることでしょう。「わたしはあなたが建てたこの宮を聖別して、わたしの名を永久にそこに置く。わたしの目と、わたしの心は常にそこにあるであろう。」(列王上9：3) こうして私たちは、天国のような家庭と永遠の家族を自分のものにすることができるのです。この祝福がすべての人にもたらされますように、心からへりくだり、イエス・キリストのみ名によって祈ります。アーメン。(このメッセージは、1986年1月12日にソルトレーク・タバナクルで開かれた家族のためのファイヤサイドにおける説教をもとにして書かれたものである)

# 準備はできていました

どんな才能や経験、趣味も  
伝道に生かせることを知った夫婦の宣教師の話

ニーナ・ハル

**伝**道に出ることは、子供の頃からの大きな夢でした。しかし、若くして結婚した私は、将来、夫のベンと共に伝道に召されることを望みながら、その夢から一時離れ、子育てに専念することになったのです。

ところが、その生涯の夢も、ベンが54歳のときに脳卒中で倒れたことで、無残にも打ち砕かれたように思われました。ベンは話すことはおろか、書くことも読むこともできなくなり、そのうえ左半身が不随になってしまったのです。

神権の力によって奇跡的に快復はしたものの、それから12年後に監督から伝道

の面接を受けたときには、まだいろいろな面で障害を負っていました。脳卒中の後遺症で、ベンのはっきりと話すことができず、家族の者以外とは話が通じないといった状態でした。しかも、言葉がうまく出てこないだけではありません。声に出して祈ることも、食事の祝福すらも、思うようにできないのです。左腕はすでに失っていましたし、右脚もはれあがったままで、いつも痛みを訴えていました。そのうえ緊張すると心臓麻痺を起しか

ねない状態でした。

しかし、それにも増して問題だったのは、経済的なことです。わが家の収入は少なく、決して十分とは言えなかったからです。それでも私たちは召しを受けることに何の不安も感じませんでした。主が必要としておられるのなら、喜んで行くというのがベンの信条だったからです。

ステーキ部長は、教会本部に申請書を提出するに当たって、かなり迷ったようでした。ところが伝道管理部から、「とも

私たちは若人のためのプログラムを組織し、宣教師のレスンプランを使って教えました。また、その集会のたびにリフレッシュメントも用意しました。それから間もなく支部が発展し始めたのです。



かく書類を送ってください。教会幹部の判断を待ちましょう」という助言があったのです。私は、自分たちにも王国建設のお役に立てる、ふさわしい場所がありますようにと、熱心に祈りました。数週間して、私たち夫婦は合衆国南東部で伝道するよにとの召しを受けたのです。私はうれしさにいっぱいでした。確かに私の祈りは聞かれたのです。

ベンにとって、ワード部でお別れのあいさつをすることは、大変なチャレンジでした。私の方で短い話を用意してあげたのですが、それをなかなか覚えることができません。ベンは、聖餐会の始まる数時間前に、特別に神権の祝福を求めました。そして聖餐会では、何の苦もなく10分ほど話すことができました。そのあと監督は全員を前に、私たちは奇跡を目の当たりに見ましたと語りました。

伝道本部での最初の夜、ひざまずいて祈るとき、私たちはもうひとつうれしい奇跡を経験しました。12年振りに、ベンが家族の祈りをするのでしたのです。

私たちの最初の任地は、会員が60人ほどの、しかもそのほとんどがお休み会員という小さな付属支部でした。そこで迎えた初めての日曜日、出席者は、神権会がベンと支部長のふたりだけ、日曜学校と聖餐会が14人という有様でした。それでも私は、聖餐の祝福や、開会の祈りができるようになったベンを見て、感激していました。

どの宣教師もそうでしょうが、私たち夫婦も新しい任地に赴くとき、いくらかの不安がありました。会員や教会外の人人に受け入れてもらえるだろうか、人の役に立つ働きができるだろうか、主は私たちの働きを喜んでくださるだろうか、など。しかし、いったん任地に行ってみると、どこへ行っても人はみな同じだということがわかりました。それまでの教会や職場での経験や、親としてしてきたいろいろな体験から、初めて出会う人々との間にもたくさんの共通点があることに気づいたので。それがわかってから、不安は消え去り、みんなの中に溶け込んでいけるようになりました。

私たちはまず、支部に登録されている会員をひとり残らず捜し出し、彼らに再び教会に集いたいという気持ちを起こさ



小さなトレーラーハウスの中を掃除したとき、足の踏み場もない状態や悪臭は少しも気になりませんでした。ひとりの神の子供を助けているという気持ちしかなかったのです。

せることから始めました。しかし、これは容易な仕事ではありません。というのは、彼らの家が四方に点在しているうえ、田舎道にはちゃんとした標識も名前もついていないからです。中には長年の間、教会から離れている人もいました。日曜日の朝が来るたびに、私たちは働きかけた人々が顔を見せてくれるのを心待ちにしました。しかし、私たちの期待に応えてくれたのは、ほんの数人だけでした。

気落ちした支部長は、支部を閉鎖したほうがよいと言い出しました。しかし、支部が閉鎖されれば、お休みしている会員はみな見捨てられ、この地域での伝道は途絶えてしまうことになります。この付属支部の運営を指導していた監督は、集会を開き、支部を閉鎖するか、それともベンを支部長として支持し、もう一度努力するかのいずれかしかないと告げました。結局、ベンが支部長として支持され、任命されました。

私たちは心からへりくだりました。た

くさんの障害が立ちはだかる中で、とる道はただひとつ、天父にすべてより頼み、助けと導きを願い、そして自分たちの全力を尽くすことだけでした。毎夜、ベンに主に知恵と力と導きを願い求めました。私たちの住まいは、日曜日には教室として使うふたつの部屋で、すぐ隣が礼拝堂でした。ベンはその静かな礼拝堂でもたびたび祈っていました。

ある夜、礼拝堂から戻ってきたベンはこう言いました。「答えを受けたような気がする。この支部は若者たちによって発展していくんだ。」

いろいろなことが起こり始めたのはこのときからです。まず、私たちは13歳の少女に福音を教え、バプテスマを施しました。するとその少女は、友達を何人か連れてきました。その少女は私たちのもとに遣わされたのです。私はそう確信しています。早速青少年向けのプログラムを組織し、裏庭でレクリエーションの集会を開きました。そして集会のたびにリフ



レッシュメントを出し、宣教師のレッスンプランを利用してレッスンをしました。

しばらくして、主は私たちに改宗して間もない家族を送ってくださいました。引っ越してきたその家族は、子供が3人で、両親が共に活発でした。この家族のお陰で、初等協会の子供がひとり増え、十代の子供がふたりMIA（現在の独身成人プログラムの前身）に加わったのです。また、私には副会長が召され（私は扶助協会の会長をしていました）、ベンには力強い副支部長が召されました。その家の16歳になる息子さんは、福音に関心がなく、まだバプテスマを受けていませんでしたが、若い長老たちの働きによって、間もなく教会員になりました。こうして聖餐の祝福をする祭司が誕生したのです。

私たちはまた、糸図調べを趣味にしている町の人たちのために特別に糸図クラスを設けたとき、教師が見つかるように天父に助けを願いました。そうすると、天父はもう一家族を私たちのもとに送ってくださいました。しかも、その家の奥さんは糸図の専門家でしたので、毎週火曜日の夜にクラスで教えてくれることになりました。また、ピアノがとても上手で、美術や工芸にもすぐれた才能と技術を持った人でしたので、支部にとって大きな財産となりました。ご主人は日曜学校の会長となり、初等協会にもまたひとり子供を迎えることになりました。

私たちはこの家族を通して、教会に関心を持っている若い夫婦がいることを知りました。その夫婦は、ほかの教会で日曜学校の教師をしていましたが、モルモンについて否定的な意見ばかり聞いてきたため、かえって興味を持つようになったというのです。別の家族を教えていた私たちは、早速、若い長老たちをその夫婦の家に送り、レッスンをしてもらうことにしました。こうしてまたふたつの家族が支部の活発な会員となり、日曜学校教師、支部書記、扶助協会教師が誕生し、初等協会の仲間が増えました。

よく聞く話ですが、お休み会員を捜していて、こんなことを経験しました。私たちはその町に住んでいるというある末日聖徒の家族を見つけ出そうと、数カ月間にわたって折り、捜し回っていました。

そうしたある朝、ベンが突然靈感を受け、町の水道局の職員に、その家族を知っているか尋ねてみようと言い出しました。水道局の職員は、「もちろん知っていますよ」と答えると、その「行方不明」の会員の職場を教えてくださいました。こうしてベンはその会員を見つけることができたのです。話を聞くと、その人は数年前に改宗したものの、もう4年間教会には行っていないということでした。奥さんと3人の子供は別の教会に行っていました。教会に来るようにお誘いすると、自分はタバコも酒もやっているからと、気乗りがしないようでした。しかし、ベンはあきらめませんでした。何度か職場でその人と会い、タバコや酒をたしなんでいたのも、彼に対する愛は変わらないことを伝えました。そして家を訪ね、8歳と13歳になる子供を教会に誘ったのです。やがてこの人はタバコも酒もやめ、家族ですべての集會に忠実に出席するようになりました。ふたりの子供もバプテスマを受け、数カ月後には彼自身も長老に聖任されて、求道者クラスの教師となったのです。

このような経験を重ねながら、小さな支部は発展していきました。そしてその年の暮れには、すべての補助組織が完全に組織され、日曜学校と聖餐会の平均出席者が50人を数えるまでになりました。さらに翌年の5月には、建物が手狭になり、新しい集會所と礼拝堂の建築用地を探すまでになったのでした。

バプテスマ数も増加し、この地域への転入家族も増えて、多くの会員が活発に集うようになりました。6月には、独立支部になり、礼拝堂の建築用地が決まりました。そして主が最初に私たちのもとへ送ってくださった人が、新しく支部長に召されたのです。

それから2カ月して、私たちは新しい地へ転任することになりました。転任する日、胸の張り裂けるような思いでした。私たちはその地で伝道してすばらしい喜びを味わい、支部の兄弟、姉妹、子供たちは自分の家族同然になっていたのです。今でも時折受ける心温まる電話や手紙に、大きな喜びを感じています。

私たちは伝道を通して特別な祝福を得ました。それは、だれであろうと、どんな

苦難を負った人であろうと、すべての人を愛することができるようになったということです。

ある日、私たちはアルコール中毒にかかった女性から電話を受けました。その女性は結婚して何年もたない頃に教会に入り、日曜学校の教師として活躍したことがある人でした。ところが、私たちが捜し当てたとき、彼女は2部屋しかない小さなトレーラーハウス（移動家屋）の中で、病に伏していたのです。

その女性を病院に連れて行ったあと、私たちはトレーラーハウスの掃除を引き受けました。彼女はそこで、15歳と11歳になるふたりの息子さんと一緒に、信じられないようなひどい生活を送っていました。私はウイスキーの空きびんやビールの空き缶、汚れ物が散らかる中で洗い物をしました。太陽がじりじりとトタン屋根に照りつけて汗が顔を流れ落ち、ゴキブリが足をはい上がり、辺りには耐えがたい悪臭が漂っていましたが、どういかわけあまり気になりませんでした。神の子供がひとり助けを必要としている、そのことしか頭になかったのです。次の聖句が幾度となく心をよぎりました。「わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者のひとりにしたのは、すなわち、わたしにしたのである。」（マタイ25：40）

私たちはそれから10カ月間にわたって、この女性に力を貸しました。その結果、ふたりの息子さんは教会の集會に来るようになりました。私たちが訪問するたびに、彼女は私の肩を抱いて、心からの愛と感謝の気持ちを言葉にしてくれました。

私たちは転任した次の地でもまた、支部内の多くのお休み会員に働きかける責任を受けました。残された4カ月の伝道期間中に、私たちは65家族も訪問することができました。幾度となく足を運んだ家族もいます。その中で活発化にこぎつけることができたのは、わずかに10家族ですが、たくさんの人々と友達になり、数々の心温まる経験をしました。私たちはまかれた種がいつか芽を出し、生長するように願っています。

伝道が終わる前日の夜に行なわれた3人のバプテスマは、私たちの伝道の最後を美しく飾ってくれました。バプテスマを受けたのは、片親が会員の子供たちで

した。その子供たちに福音を教えたことは、伝道中で最も霊的な経験のひとつです。レッスン中、目を大きく見開いて一言一言に熱心に耳を傾ける子供たちを見ていて、私はまるで天使たちに取り囲まれているような思いがしました。パプテスマ会には大勢の人が出席し、そこでもまたみたまを強く感じました。そしてそのあと、私たちは抱き合いながら、涙の別れをしたのでした。

主が夫や私のような弱い人間を使ってその目的を果たされるということは、実に驚きです。ベンはよくこう言っていま

した。「私は大したことはしていません。話すのはほとんど妻がしてくれますから。」でも、それは違います。障害はあっても、ベンには伝道の業に必要な特別な才能と資格が具わっていました。主がベンを通してみ業を進めることができたのも、また伝道中の大変な時期に私たちを勇気づけてくださったのも、ベンに忍耐と不屈の精神、自己を捨てた寛大な心と信仰、悪習に引きずられたみじめな人々に手を差し伸べる能力があったからにほかなりません。

伝道を振り返ってみて、意外だったの

ですが、大切なことに気がつきました。それは、日常生活のあらゆる経験が、たとえ平凡なありふれたようなことであっても、伝道の良い備えになっていたということです。スカウト活動やMIA、日曜学校などで若人と共に行動してきたベンの長年の経験は、伝道に大いに役立ちました。職場で人を組織し指導してきた経験もベンには力となりましたし、手先が器用だったこともずいぶん役立ちました。また、ベンが子供が大好きで、子供と付き合うのが上手でしたから、小さい子供たちからも好かれ慕われました。

# 才能を生かす

## 夫婦の宣教師たちの模範

バーノン、バーサ・プロクター

**夫** 婦の宣教師がたくさんすばらしい業績をあげています。教会のほとんどの伝道部では、夫婦の宣教師の持つ証や知識、経験、知恵が必要とされ、彼らが奉仕している地域では、どこでも教会が強められ、会員に祝福がもたらされているのです。いくつか例をあげてみましょう。

ある夫婦がカナダへ伝道に召されました。最初の日曜日の集会で自己紹介をしたとき、長老は自分の奥さんを「41年来的恋人」と呼びました。

その集會に出席していた人の中には、結婚生活に問題を抱えている夫婦が何組もありました。しかしそれから数カ月の間に、本当に幸福な夫婦とはどのようなものかを目の当たりにし、その模範に影響されて、彼らは生活を変えたのです。後にその中のひとりが、夫婦の宣教師にこう言いました。「おふたりがこの伝道部に召された理由をご存じですか。私たち

の結婚生活を救うためですよ。」

この夫婦の宣教師は、ただそこにおいて互いに愛を示し合うだけで、すばらしい影響を与えることができたのです。

北カリフォルニア出身のある夫婦は、

ボリビアで伝道しました。その小さなインディオの村では、丘の中腹にある泉から水をくんでくるために、1キロ半も坂道を上らなければなりません。毎日毎日水を運ぶのは重労働でしたし、衛生面でも大きな問題がありました。

そこで夫婦の宣教師に、泉から水道管を引く工事を監督する責任が与えられました。長老は工事の設計を行ない、会員や教会外の人々をグループに分けて責任を割り当てました。数週間うちに、岩だらけの台地に深い溝を掘ってプラスチック製の管を通し、泉と村の中心部とを簡易水道でつなぎました。村でたったひ



ボリビアに召された夫婦の宣教師は、丘の泉から水道管を引く工事の監督を任せられました。

私もまた、ベンと同じような経験をしました。私にとっても、これまでの生活はほとんどどれも、伝道に必要な業をするための備えだったように思えるのです。子供のときに詰め込んだわずかな知恵だっただけですし、音楽や演劇の経験、秘書や看護婦としての仕事、心理学を学びながら受けた訓練、精神病院での仕事、ホームメーカー技術、あの世界的な大恐慌・大不況時代の経験、セミナーの責任、たくさんの子供を育てあげた経験、教会での責任など、どれを取ってみてもみな伝道に役立ちました。主のみたまに

よって、自分では気づかなかつたいろいろな才能が役立つことに、ただただ驚いています。

全般的に見て、私たちの1年半の伝道生活は、楽しくすばらしいものでした。私たちが受けた祝福や祈りに対する答えは(個人的な祈りや、ほかの人のための祈りも含め)、あまりに多すぎて語り尽くせません。主はいついかなるときにも、どこにいても、常に私たちと共にいてくださいました。心やさしい親切な方々と愛を分かち合い、経験を共にできたことは、私たちの生涯で何よりもすばらしい

思い出となりました。また、若い長老たちと良い関係を築けたことも、大切な思い出です。毎月開かれるゾーン大会で、霊的に高められ、靈感を受けたことも、忘れることができません。

伝道に対して弱気になっているご夫婦や、できないと感じておられる方々に、ぜひ申しあげたいと思います。私たちにできたのですから、皆さんにできないはずがありません。ためらったり、恐れたりしないでください。自分から進んで行動し、主を信頼すれば、主は必ず必要な力を与えてくださるでしょう。

とつ水道の誕生です。

開通式は、村中総出で行なわれました。教会員でない人々も教会に対してとても友好的で、暮らしを楽にしてくれる水道の敷設に感謝していました。この仕事に没頭してきた夫婦の宣教師は、こう言いました。「私たちの伝道生活で最高の仕事です。」

ある夫婦の宣教師は、アメリカ合衆国にある小さな支部に派遣されました。そこはお休み会員が多く、閉鎖寸前の状態でした。しかも、地元での教会の評判は、あまりよくなかったのです。

その長老は伝道に出る以前は、ライオンズクラブの会員で、市の職員を務め、腕のよい園芸家でもありました。そこで、地元のライオンズクラブに連絡を取ったところ、例会で話をするように招かれました。長老はその席で、自分たちが夫婦の宣教師であることを説明し、町にやって来た理由を話しました。また、支部の会員が集まる建物を必要としていることも伝えました。

集会が終わると、出席者たちが長老のところに来て自己紹介し、何かできることがあれば援助したいと申し出てくれました。そしてある人は、購読者数1万5,000の新聞に、宣教師について記事を書かせてくれました。また別の人の計らいで、ふたりはテレビに出てインタビューを受け、教会や系図について様々な質問に答えることができました。

長老は園芸の専門家でしたので、その技術を生かしてお休み会員の活発化を助け、人々の関心を福音に向けました。ま

ず、1ヘクタールほどの土地を借りて、作物を植える準備を整え、それから一般の人々に参加を呼びかけたのです。参加者には1区画ずつ畑を割り当て、菜園作りを教えました。やがて全員が豊かな収穫に恵まれ、「このあたりで一番の菜園だ」と口々に言いました。こうして、多くの家が宣教師を迎え入れてくれるようになったのです。現在、この支部は力強く発展し、会員たちは教会堂を建てようと頑張っています。

南太平洋の島に赴任した夫婦の宣教師は、小さな電気オルガンを持って行き、集会でそれを使いました。島にはそのような楽器がなかったので、オルガンの音色に誘われて大勢の人が集まり、一緒に歌いました。ほかの教会の人たちまでが、美しい伴奏に合わせて歌いたいと、末日聖徒の集会にやって来ました。

トンガに召された夫婦の宣教師もいます。長老は熟練した検眼士でしたので、仕事で使う器具を携帯して行き、才能を生かして大勢の人と親しくなりました。こうしてできた友人は、自分たちだけでなく、将来伝道に来る宣教師のためにも、力になってくれるのです。

以上のように、年輩の夫婦や独身姉妹の宣教師は様々な方法で福音を説き、教会を強めることができます。しかも、こうした伝道の実例は枚挙にいとまがありません。

宣教師の召しを果たせる立場にありながら、自分に伝道する能力があるだろうか、不安になる人もいるかと思いますが、どうか恐れしないでください。皆さんの特



南太平洋の島に赴任した夫婦の宣教師は、オルガンを持って行きました。教会員でない人までがその音色に誘われて集まり、一緒に歌いました。

別な才能や経験、知識、知恵などが最も必要とされる場所へ、啓示によって召されるからです。

留守の間、残された家族は大丈夫だろうか、不安に思う人もいるかもしれません。心配しないでください。主が守ってくださいます。どうぞ伝道に出て働いてください。そうすれば、皆さんも家族も、共に永遠の祝福を受けることでしょう。

\*バーノン、パーサー・プロクター夫妻は、ペルー・リマ北伝道部で伝道し、現在はソルトレーク・シティーのプライアンワード部に所属し、ソルトレーク神殿の儀式執行者を務めている。

# まず什分の一を 納めなさい

メッティ・ハンセン・ロー

い つでしたか、私の友人がこう言いました。「まず支払いを全部済ませて、それから什分の一を納めるのが一番よ。」私にもその気持ちはわかります。日々の生活をやりくりするのが、どんなに大変か知っているからです。そのため私たちはときどき、果てしない負債を負っているような気持ちになることがあるのです。

大抵の人は、次のような誘惑を1度や2度は経験していると思います。「先に必要な支払いを済ませて、什分の一は後から、そう、来月にでも納めましょう。」でも、数年前のある経験から、私は確信しました。どのような事情も、什分の一を後回しにする理由にはならないのです。

1978年の春、私はデンマークで、タイプセット(植字)の仕事で自分で始めました。収入はすぐに、勤めに出ていた頃の倍になりました。予算を組み、こまめに帳簿をつけ、税金を記録しました。そのうちに、什分の一の口座を作ろうかと思いついたのです。実際は普通の預金口座でしたが、私はそれを什分の一の口座と呼び、非常によいアイデアだと思いました。それから数カ月後に、什分の一の口座にたまった額を見て、私は驚いてしまいました。そして「いつか貯金を全部引き出して、監督に渡しましょう」と思いました。ところが、金額が増えるにつれて、引き出すのがだんだんむずかしくなりました。そのうえ、貯金を増やすのが楽しみになってきたのです。

そうこうしながらも、半年間は多くの仕事と収入に恵まれていました。ところが、突然注文が来なくなったのです。来る日も来る日も、新しい仕事が入りませ

ん。蓄えが次第に減り、私は不安になり始めました。しかし、次のように考えて自分を元気づけました。「この状態が続いたとしても、什分の一の口座からいつでもお金を借りることができるわ。」

母にこの考えを話すと、即座にこう言われてしまいました。「主にお返しするお金に手をつけてはいけません。」母は意志の強い頑固な女性なので、私は大人になっても、母の言葉を受け入れられないときに反発することがありました。母はさらに言いました。「監督に什分の一を納めるのは、早い方がいいでしょう。きょう、預金を全部下ろして監督のところに持って行きなさい。」

しかし、家賃や車の経費、税金、電気代、水道代など、支払いが山ほどあるのに、手元のお金といえば、什分の一の預金しかないのです。私がそのことを説明すると、母は言いました。「心配しなくても大丈夫。きょうのうちに監督に納めた方がいいわ。」

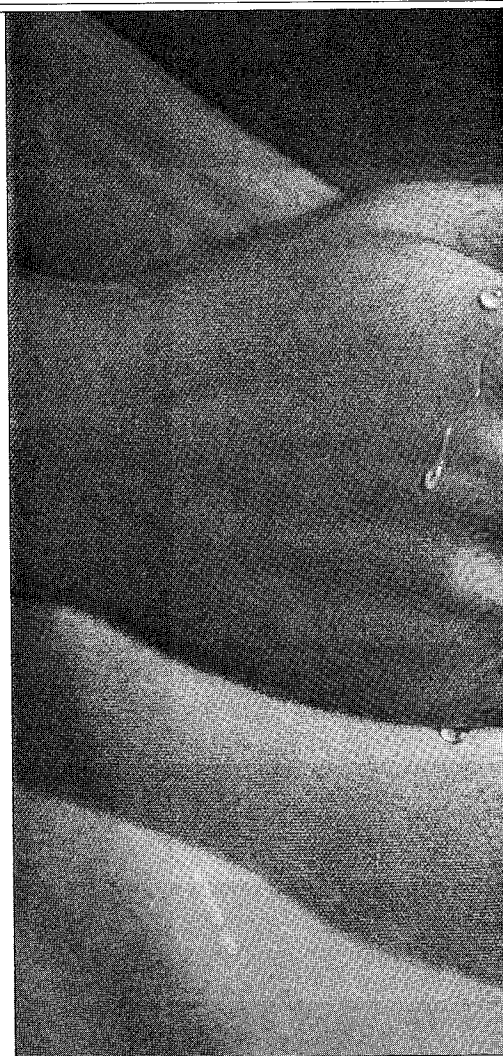
私は気が進みませんでした。母の言葉が正しいことはわかっていました。そこで、まっすぐ銀行へ行きました。これまでの人生で、預金を引き出すのに、あの日ほど試されたことはありません。私は力を与えてくださるよう、主に祈りました。

それでもまだ、監督にお金を手渡すときは、重苦しい気持ちでした。収入なしに、どうやって仕事と家庭を切り回すことができるのでしょうか。母が言いました。「あなたの長女は、もう一緒に断食できる年頃です。丸1日断食して祈りましょう。」私たちはそのようにしました。断食をして3日経ちましたが、何も起こりませ

せん。母が「もう一度断食をしましょう」と言いました。私たちは再び断食をしました。その翌日のことです。郵便配達人が、初めての依頼人からの注文を携えて、ドアをたたきました。それは、翌月いっぱい毎日忙しく働かなければならないほど大きな仕事でした。涙があふれ、母とふたりの娘たちと共にひざまずいて、主の恵みに感謝しました。

ところが、その後とても不思議なことが起こりました。コンピューターに植字用のコードを入力しようとしても、どうしてもうまくいかないのです。何度も試してみましたが、これまで何千回となく使ってきたはずのコードを、コンピューターが受けつけません。

私は、この奇妙な現象について祈る必要があると感じました。そして、祈ってから原稿を取りあげると、ふいに手が汚れてベタベタしているような感じがしました。私は手をごしごし洗い、また仕事





「原稿を取りあげると、きれいな紙に印刷されているにもかかわらず、手が汚れたような感じがするのです。」

に戻りました。しかし原稿を取りあげると、きれいな紙に印刷されているにもかかわらず、手が汚れたような感じがするのです。

私はどうしてよいかかわからず、泣き出してしまいました。もう一度ひざまずいて、主に助けを求めました。祈り終わって少しの間そのままひざまずいていると、原稿を最初からではなく、最後のページから読むべきだと感じました。

私は仕事を仕上げることばかりに気をとられていて、原稿を読むことなど考えてもみませんでした。その原稿は、デンマークの国立大学で使用する教科書の原案でした。

後ろのページから読んでいくと、2ページ目に、イエス・キリストを冒瀆する言葉が書いてありました。私はこれまで読んだこともないようなひどい文章に、ぞっとしました。しかも筆者は、聖書の言葉を引用して、その侮辱的な主張を擁

護しているのです。私の愛するデンマークで、大勢の若い学生たちがこの冒瀆に満ちた文章を目にするのかと思うと、悲しくて涙が出てきました。

突然、悪寒が走りました。心の中でひとつの声が出たのです。「メッティ、これを植字してはいけません。もしそうするならば、キリストを裏切ることになる。」また、別の声も聞こえてきました。「あなたが植字しなくても、いずれは印刷されることになるのよ。この仕事をすれば、来月の支払いが楽になるわ。」

私は再び、力を求めて祈りました。あの時ほど頻繁に祈ったことはありません。私は印刷業者に電話をかけて、残念ですがこの仕事はお引き受けできませんと伝えました。業者は大変驚いたようでしたが、先方でも原稿を読んでいる暇がなかったことを認めました。そこで私は、不快な箇所をお読みしましょうかと言って、その文章を読んで聞かせました。すると、

「何か宗教を信じているのですか」と尋ねられたので、教会員としての自分の生活を手短かに話しました。業者は私の話を尊重してくれ、「別の人にその仕事を依頼しますから、原稿を返送してください」と言いました。私は心の中で「もう二度と、この業者から仕事を受けることはないだろう」と思いました。

再び、母と娘と私は断食して祈りました。何の注文も、仕事もないまま、4日が過ぎました。この悲惨な数日間、私はもう少しで、仕事を断わってしまったことを後悔するところでした。私は主に嘆願しました。そして抗議までしたのです。「私をお見捨てになるおつもりですか。私は什分の一をきちんと納めました。信仰のために、収入のある仕事も断わりました。何が欠けていると言われるのですか。どうぞ、お助けください。」もし応えがなければ、子供たちまでが次のように尋ねていたことでしょう。「お母さん、主が助けてくださらなくても、日曜日に教会に行くのはどうしてなの。」

その翌日、5日目のことです。堅固な信仰を持った母でさえ、疑いを抱き始めた頃、玄関のベルが鳴りました。郵便配達人でした。「お宅の郵便物が多すぎて、2回に分けなきゃ運べませんよ。」そう言って、デンマーク各地から届いた大口の注文を、8つも持ってきてくれました。昼夜働いたとしても、6カ月はかかる量の仕事です。

確かに、主は私たちのために天の窓を開いてくださいました。それ以来、仕事が途切れたことはありません。原稿を返したあの業者も、今では一番の得意先になっています。

あのことがあってからというもの、私も娘たちも、什分の一を納めるのがむずかしく思えたことはありません。ときどき、苦しい時期に誘惑を受けることはあっても、主が惜しみなく注いでくださった祝福を否定することはできないからです。また、主から教えられた次の教訓も忘れることができません。「収入を得たら、まず什分の一を納めなさい。」

\*メッティ・ハンセン・ローは3児の母で、ソルトレーク・シティーワード部の聖歌隊員を務めている。

# 質疑応答

●本誌の解答は問題解決の一助として与えられたものであり、教会の教義を公式に宣言するものではありません。



教会の基本的な教えの中には、モルモン經に記されていないものが幾つかあるのに、なぜモルモン經が「完全なる福音」(教義と聖約20:9)を載せていると言えるのですか。光栄の3つの段階、永遠の結婚、前世における靈の存在、死者のためのバプテスマなどの教義が、モルモン經に含まれていないのはなぜですか。



解答者

ダニエル・H・ラドロウ

(教会コーリレーション委員会  
ディレクター)

イエス・キリストはニーファイ人に向かって、「福音」という言葉を次のように定義されました。「見よ、われはすでにわが福音を汝らに授けたるが、その福音を言い換うれば次のごとし。まずわが父われをつかわしたまいたれば、われは父のみところを行わんとてこの世に来れり。」(IIIニーファイ27:13)それから救い主は、贖罪について再度話されました。すなわち、悔い改めて、バプテスマを受け、聖靈を授かり、終わりまで耐え忍ぶことの必要性を説かれたのです。(IIIニーファイ27:13-22参照)

「福音」とは、「よきおとずれ」という意味です。つまり、イエス・キリストによって、私たちが天父のみもとに帰れるようになったという、喜ばしい知らせなのです。イエスは、罪のない完全な生涯と、ゲツセマネや十字架での苦難を通して、アダムとイヴによる最初の咎を贖われただけでなく、私たちが罪の結果である靈の死から救われるようにしてくださいました。また、十字架上の死と復活を含む贖罪を通して、肉体の死という永遠の鎖から私たちを解放してくださいました。

贖罪のこれらの効力は全人類に及びますが、「よきおとずれ」にはそれに加えて、神のみ前にたち帰るために私たちがしなければならないことも含まれています。ペテロはそのような原則を幾つか教えました。ペンテコステの日に、「兄弟たちよ、わたしたちは、どうしたらよいのでしょうか」(使徒2:37)と尋ねられたとき、ペテロは次のように答えたので

す。「悔い改めなさい。そして、あなたがたひとりびとりが罪のゆるしを得るために、イエス・キリストの名によって、バプテスマを受けなさい。そうすれば、あなたがたは聖靈の賜物を受けるであろう。」(使徒2:38)

ペテロのこの答えは、信仰箇条第4条に相当するものです。「われらは、福音の第一原則と儀式とは、第1、主イエス・キリストを信ずる信仰、第2、悔改め、第3、罪の赦しを受くるために水に沈めらるるバプテスマ、第4、聖靈の賜を授かるための按手札なることを信ず。」

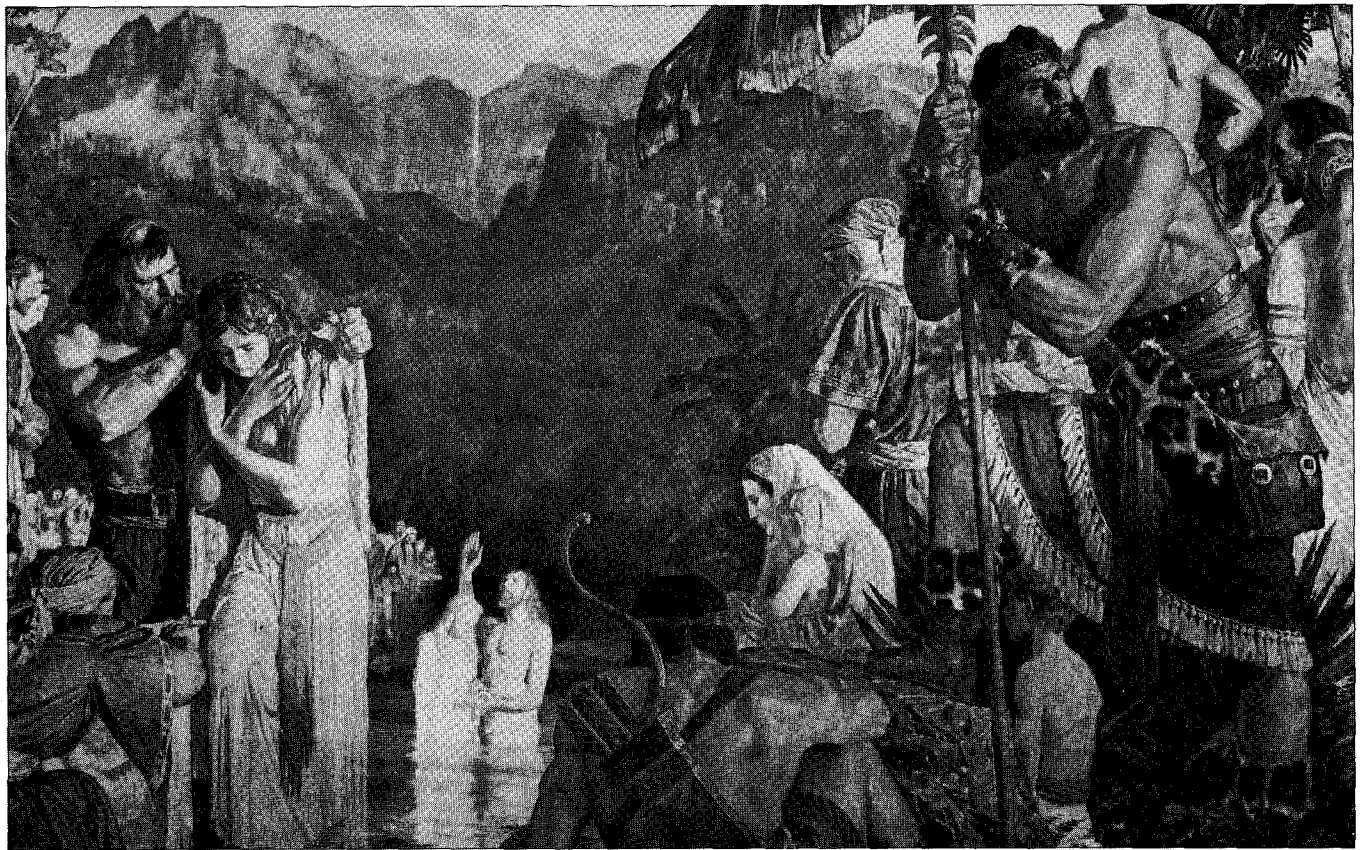
救い主がニーファイ人に与えた次の言葉は、福音を最もわかりやすく要約したもののひとつです。

「そもそも、清からざるものは御父の王国に入ることを得ず。信仰をし、すべての罪を悔い改め、終りまで誠をつくし、以てわが血によりてその衣を洗いし者のほかに御父の安息に入り得る者なし。」

さて、世界の隅々に至る者たちよ。汝らは聖靈を受けて聖められ、また終りの日にわが前に罪なしとせられんために今悔い改め、われに来てわが名によりてバプテスマを受けよ。これ汝らに与うる命令なり。

われまことに、まことに汝らに告ぐ、以上はわが福音なり。わが教会に於てなすべきことは、汝らすでによく知れり。すなわち、汝らが見たるわが行いを汝らもせよ。これらのことは汝らも行ふべきことなればなり。」(IIIニーファイ27:19-21)

「完全なる福音」の本質は、この簡潔



モルモン経の中にはバプテスマの原則が教えられています。しかし、幾つかの儀式は後の世になって明らかにされました。

な聖句の中に見られますが、さらに詳しい説明がモルモン経の至るところに記されています。それらの聖句を通じて、モルモン経は贖罪の教義と、福音の基本的な原則と儀式を明らかに強調し、説明しているのです。それに従う人々は、日の光栄の王国で神のみ前にとどまることができるでしょう。ですから、たとえ昇栄に必要なすべての儀式について記されていないとしても、モルモン経には完全なる福音、すなわち「よきおとずれ」が載っているとと言えるのです。

次に2番目の質問です。なぜモルモン経には、教会のすべての教義にかかわる教えが含まれていないのでしょうか。

有能な作家は、作品を書くときに、その目的と読者とを心に描いているものです。したがって、なぜある教えが書かれていて、ほかの教えが書かれていないのかを理解するには、モルモン経の著者の目的を知ることが大切です。

モルモン経のおもだった4人の著者(版を刻んだ人または編纂した人)は、ニー

ファイ、ヤコブ、モルモン、モロナイです。この4人はいずれも、イエス・キリストに直接会った証し人です。ニーファイとヤコブは、肉体を受ける前のイエス・キリストの訪れを受け(IIニーファイ11:2-3参照)、モルモンとモロナイは、復活したイエス・キリストの訪れを受けました。(モルモン1:15; イテル12:22-39参照) さらにモロナイは、肉体を受ける前のキリストに関して、ジェレドの兄弟が残した証を記しています。(イテル3:9-16参照) このように4人の兄弟たちの記録は、キリストの神性を力強く証しているのです。

4人の著者はそれぞれ、記録のおもな目的は人々をキリストに導くことであると指摘しています。目的のひとつとして、彼らの記録が「ユダヤ人の記録」(Iニーファイ13:23参照)である聖書の教えに対する「もうひとつの証」になることをあげた著者もいます。けれども、福音の教えと儀式をすべて網羅することを目的とした著者は、ひとりもいません。事実、

彼らがしばしば述べているように、モルモン経には、キリストを信ずるために必要な事柄と、記録するように靈感を受けたり命じられたりした事柄だけが記されているのです。(Iニーファイ19:2; IIニーファイ28:2; 31:1; 32:7; ヤコブ1:19; IIIニーファイ26:12; 30:1; モルモン5:9-13; 8:1; イテル8:20; 13:13参照)

簡潔な例を取りあげて、この4人の著者がキリストに関する知識について述べた言葉に注目してみましょう。

ニーファイ：「だから私たちが力をつくして書き記すのは、自分たちの子孫と兄弟たちを説得してキリストを信じさせ……るためであ[る。]……私たちはキリストのことを話し、キリストのことを喜び、キリストのことを説教し、キリストのことを予言し、また私たちの子孫にどこに罪の赦しを求めらるかを知らせるために自分たちが予言したことも書くのである。」(IIニーファイ25:23, 26)

ヤコブ：「私たちがこのいくつかの言

葉をこの版にのせるのは、私たちがもうすでにキリストのことを知っていることと、またキリストが降臨したもう何百年も前に私たちばかりでなく私たちよりも先に立たすすべての聖い予言者たちもまた、すでにキリストの栄光を待ち望んでいたことを兄弟たちと子孫たちに知らせるためである。」(ヤコブ4:4)

モルモン：「その先祖のことを知り、自分の罪と悪事とをことごとく悔い改めて、イエス・キリストが神の御子であることを……信じなくてはならない、この事もよく知れ。……」

それであるから、悔い改めてイエスの御名によってバプテスマを受け、またキリストの福音を心に捕えよ。福音はこの経典に記されてあなたたちに伝わるだけでなく、ユダヤ人から異邦人に伝わり、異邦人からあなたたちに伝わって行く書物にも記されてある。

この経典〔モルモン経〕を書き記したのはユダヤ人から伝わるあの書物(聖書)をあなたたちに信じさせるためである。もしあなたたちがその書物を信するならばこの経典も信するにちがいない。もしこの経典を信するならば、あなたたちの先祖のこと、また神の権能と力とによって先祖の間になされた驚嘆すべき業のことを……知るようになる。」(モルモン7:5, 8-10)

モロナイ：「私はこれらの事をあなたたちが忘れないようにすすめる。なぜならば、あなたたちが神の法廷で私と逢う時が……来て、その時主なる神が『この人の書きしわが言葉は……汝らに宣べ伝えしにあらざるや』とあなたたちに仰せになる……からである。……」

キリストの御許に来てキリストによって全くなれ。……

もしあなたたちが神の恵みを受けキリストにより完全な者となって、神の能力と権能とを否定せぬならば、神の恩恵を蒙りキリストにより聖められ、御父の誓約の中にあること、すなわちキリストが血を流したもうたことによりあなたたちは罪の赦しを受けて汚れを除かれ聖くなる。」(モロナイ10:27, 32-33)

4人の著者は、真の教会が地上から取り去られ、不信仰な時代を経た後、終わりの日に彼らの記録が世に出ることも知っていました。(IIニーファイ25:3-23; 26:16-24; ヤコブ4:4, 13-16; モルモン8:25-35; モロナイ10:24-34参照) このように、4人の目的は、教会員になったあとで受けるはずの福音のすべての教えと儀式を伝えることではなく、私たちがキリストと真の教会に導くことだったのです。

モルモンは、様々な版を抄録したときの経緯を説明して、すべてのことを記録するのは不可能であると述べています。「私の民の事蹟はその百分の一さえも書くことがむづかしい。」(モルモン言1:5) それにもかかわらず、モルモンをはじめとするおもな著者たちは、イエス・キリストを証するという明確な使命を忠実に果たしたのです。

主ご自身が指摘されたように、主は神の子らと共にみ業を進めるとき、「言葉に言葉を加え、誠命に誠命を加えて……ここにも少しく教え、かしこにも少しく教え」られます。(IIニーファイ28:30) 1830年4月6日、この神権時代に教会が回復されたとき、現在私たちが受けている儀式の多くは、まだ教会員に与えられていませんでした。たとえば、この質問に出てくる事柄について、詳しい教えを含む啓示が与えられたのは、以下に示すように、ずっと後になってからなのです。

1. 光栄の3つの段階に関する詳しい教えは、教義と聖約第76章にあるが、この啓示が与えられたのは、1832年2月16日である。
2. 永遠の結婚に関するおもな教義と指示は、1843年5月(第131章)と1843年6月(第132章)に与えられた。
3. 前世での霊の存在に関する教えは、教会設立後かなりたってから、ジョセフ・スミスによって与えられた。1844年4月の総大会で、この教義に関する最も重要な声明のひとつが出された。(「予言者ジョセフ・スミスの教え」pp. 342-62参照)
4. 死者のためのバプテスマに関する教

えは、主として1841年1月(第124章)と1842年9月(第127, 128章)に明らかにされた。

イエス・キリストも地上におられたとき、「言葉に言葉を加え」られて福音を身につけていかれました。「彼は始めに完きを受けずして絶えず恩恵に恩恵を加えられ、ついに完きを受けしなり。而して、かくて彼は神の子と呼ばれたり。そは、最初より完きを受けしにあらざればなり。」(教義と聖約93:13-14)

主は、「言葉に言葉を加え、誠命に誠命を加え」(IIニーファイ28:30参照)られて学ぶという原則について、次のように言われました。

「われこれらのことばを汝らに告ぐるは、汝らわが言うところを聞いて礼拝の方法を覚りて知り、礼拝するものを知り、かくしてわが名によりて御父に來り、而して時至りて御父の完きを受けんがためなり。……」

而して、人もし彼の誠命を守らずんば完きを受くることなし。」(教義と聖約93:19, 27)

これらの原則は、生ける予言者には真の教会の会員のために、聖霊の力によって「主の意」と「主の精神」を受けける資格がある、という教義と一致しています。(教義と聖約68:4参照) またこの教義は、信仰箇条第9条にも表われています。「われらは、すべて神のこれまでに啓示したまいしこと、すべて今啓示したもうことを信じ、なお今より後、神の王国につきて多くの偉大にして重要なことを啓示したもうことを信す。」

これらの教えや教義は、予言者ジョセフ・スミスの次の言葉とも一致しています。福音の原則は「聖なる書物やモルモン経に基づくもので、人が日の光栄の王国に入るための唯一の道である。」(「予言者ジョセフ・スミスの教え」p.16) したがって、モルモン経に記されている完全なる福音とは、人が日の光栄の王国で神のみ前に入るにふさわしくなるために守る必要のある、これらの教えを意味しているのです。





モルモン経には、神はひとりだけであって、しかも霊のお方であると取れる聖句がありますが、どう説明すればよいでしょうか。



解答者

ロイ・W・ドクシー

(十二使徒評議員会事務局補佐、  
ブリガム・ヤング大学宗教教育部  
名誉学部長)

モルモン経を読んでいると、神会に関して末日聖徒の教義と一見矛盾するような聖句に出会い、戸惑いを覚えることがあります。しかし、モルモン経の全編を貫く教えに照らし、前後の文脈からそれらの聖句を判断すれば、少しも矛盾していないことがわかります。すなわちモルモン経は、父なる神と御子イエス・キリストと聖霊が別々のお方であり、御父と御子が霊のお方ではないと教えているのです。

「神は一つよりも多いか」

この質問はアルマ書第11章に関連して

よく出されます。その章には、敵対者ゼズロムが宣教師アミュレクに論争を挑むくだりが描かれています。

「ゼズロムは善を破ろうとするために悪魔のはかりごとに熟練している男であるから『お前は私の質問に答えてくれるか』と言ったのである。

それに対しアミュレクは『もし答えることが私の中にある主の「みたま」にかなうならば答えるが、主の「みたま」にかなわないならば私は何にも答えない』と言った。するとゼズロムはアミュレクを試みて『見よ、ここに銀六オンタイある。汝がもしも全能の神がないと言うなら私はこれをみな汝にやろう』と言った。……

ゼズロムがまた『それならば、汝は生ける真の神があると言うのか』ときくと、アミュレクは『さよう、生ける真の神はまします』と答えた。

そこでゼズロムが『神は一つよりも多いか』と問うと、

アミュレクはそうではないと答えた。

またゼズロムが重ねて『それではどうしてそれらのことを知っているか』ときくと、

アミュレクは『天使が私に示した』と答えた。(アルマ11：21-22, 26-31)

アミュレクの言葉を理解するには、その背景となる事柄を十分に知る必要があります。ニーファイ人の先祖であるイスラエル人の多くは、歴史の大半を通じて、エジプトやカナンの異教の神々に心を寄せてきました。モルモン経には、ゼズロムの住むアモナイハの民が具体的にどのような背教的思想を受け入れていたのか、記されていません。しかし、先祖のイスラエルの民の一部がそうであったように、アルマの時代の背教したニーファイ人の中に、偶像崇拜者がいたことは明らかです。アミュレクの同僚アルマは、大判事と教会の大祭司を兼任していたとき、教会員を信仰のあつい堅固な民にしようと努力しました。ところが、「教会に属していない者は魔法を使い、間違った神を拜ひたりこんでいたのです。(アルマ1：32) やがて背教の問題が深刻化してきたため、

アルマは判事の座をほかの人に譲り、「自分がその民であるニーファイ人の中を巡ってあるいて、神の道を民に宣べ伝え」ました。(アルマ4：19)

アルマは宣教師として巡り歩くうちに、偶像礼拝に陥っている民が大勢いることに気づきました。たとえば、ソーラム市の民は「主の道を曲げ、またその支配者であるソーラムが人々の心を誘って物の言えない偶像を拜ひたりこませ」ていたのです。(アルマ31：1)

以上が、アルマとアミュレクがゼズロムと相対するまでの背景です。この観点から見れば、アミュレクの答えは完全に理解できますし、もちろん、正しいことがわかります。すなわち、ただひとりの「生ける真の神」がましまして、人間の造った偽りの神々の中に並ぶものはない、ということなのです。

もちろんアミュレクは、神会には3人の別々のお方がおられ、目的において一致しておられることを理解していました。ですからゼズロムに向かって、「あらゆる人が……一つの永遠の神会を成すお方、すなわち御子なるキリストと父なる神と聖霊との法廷に召される」と宣言したのです。(アルマ11：44)御子と聖霊は、その目的や使命や栄光において「生ける真の神」とひとつになっておられますから、お三方はまぎれもなく「一つの永遠の神会」を構成しておられるのです。

アミュレクとゼズロムの話が終わると、アルマは「ゼズロム〔が〕アミュレクの言葉に言い破られた……様子を見てゼズロムに話しかけて、アミュレクの言葉を証明し、またアミュレクよりもさらに一歩進めてくわしく聖文を解き明し、またアミュレクの話さなかつたことまでも説き聞せた。」(アルマ12：1)

アルマはゼズロムに「一歩進めてくわしく」説明する中で、神会の概念を一層明確にしています。

「神はその御子の御名を通して人々に勧めたもうた。(これがすなわち備そなわっている贖いの計画である) すなわち「汝らもし悔い改めてその心をかたくなにせずば、われはわが生む独子によりて汝らを憐む

べし。よりに悔い改めてその心をかたくなにせざる者は、わが生む独子によりて罪の赦しを得ざる憐みを求むる権利を受く。」(アルマ12:33-34。下線筆者)

ここで明確にされた真理は、神とその独り子が別々のお方である、ということです。これは、アルマとアミュレクがゼーズロムと交わした議論の中で明らかにされています。また興味深いのは、ひとりの「生ける真の神」に関するアミュレクの言葉が、同じような状況の中で語られたパウロの言葉とよく似ていることです。パウロはコリント人に、次のように語っています。「わたしたちは、偶像なるものは実際は世に存在しないこと、また、唯一の神のほかには神がないことを、知っている。

というのは、たとい神々といわれるもの、あるいは天に、あるいは地にあるとしても、そして、多くの神、多くの主があるようではあるが、

わたしたちには、父なる唯一の神のみがいますのである。万物はこの神から出て、わたしたちもこの神に帰する。また、唯一の主イエス・キリストのみがいますのである。万物はこの主により、わたしたちもこの主によっている。」(Iコリント8:4-6)

パウロもアミュレクのように、唯一の神、すなわち御父の存在を宣言し、同時に、主イエス・キリストの神性に関して証を述べているのです。

モルモン経には、御父と御子とはっきりと区別して描かれている箇所があります。たとえば、復活したキリストがニーファイ人にみ姿を現わされる直前に、次のように宣言する御父のみ声が聞こえてきました。「わが喜ぶ愛子を見よ。われはこれに由りてすでにわが名の栄光を示しぬ。わが愛子に聞け。」そこで群衆が「また天を仰ぐと、天から一人の男の方が降りたもうのが見え、そのお方が御子イエス・キリストでした。(IIIニーファイ11:7-8)これと同じような出来事が、聖書の中では、救い主のパテスマヤや変貌についての記録に見られます。天父はいずれの場合も、天から語りかけて、地上

のイエスをご自分の愛子として認めておられるのです。(マタイ3:17;17:5参照)

神会が目的(人の救い)においてひとつであることは、モルモン経と聖書の両方に説明されています。モルモン経によれば、復活したイエスは次のように祈られました。

「父よ、われは世のために祈らず、ただその信仰の厚き故に父が世の中より選び出してわれに加えたまえる者共のために祈り、かれらがわれによりて清められんことと、また父がわれにいます如くわれもかれらに在りてかれらと一つになり、かれらによりてわが栄光を示さんことをねがう……。」(IIIニーファイ19:29)

また、救い主はパレスチナでみ業を行なわれたときにも、同じような祈りを捧げられました。聖書にその祈りが記録されています。(ヨハネ17:11,21-22参照)イエスはいずれの場合も、ご自分と御父が存在や実体においてではなく、目的においてひとつであるように、すべての弟子が目的をひとつにして一致できるようにと祈られました。

#### 「神の御子は永遠の父であるか」

ゼーズロムは論点をはぐらかそうとして、「神の御子は真の永遠の父であるか」と尋ねました。

アミュレクはこれに答えて言いました。「さようである。神の御子は天地と天地の間にある万物との永遠の父である。神の御子は始めにしてまた終り、最も前にしてまた最も後である。

また神の御子はその民の罪を贖うためにこの世に降臨し、その名を信するすべての者の罪とがを負いたもう。」(アルマ11:38-40)

モルモン経は、イエス・キリストが神の御子であると同時に、いくつかの点において、私たちの父でもあられることを明らかにしています。まずひとつには、イエスは御父の指示の下にこの世界を創造されたので、天地の父であられます。たとえば、ベンジャミン王は次のように言明しています。「このお方は神の御子、天地の父、創世の時から万物を造りたも

うている造り主イエス・キリストと呼ばれ……る。」(モーサヤ3:8。下線筆者)

これは新しい教義ではありません。聖書の中の予言者たちも、御子が天と地の造り主であると証しています。ヨハネは次のように証しました。「すべてのものは、これによってできた。できたもののうち、一つとしてこれによらないものはなかった。」(ヨハネ1:3)パウロも、「万物は、天にあるものも地にあるものも……みな御子にあって造られた」と宣言しました。(コロサイ1:16)しかし、御子が天父の代理人として働かれたことは明らかです。パウロはエペソ人に宛てた手紙の中で、「イエス・キリストにより万物を創造された神」(欽定訳エペソ3:9)という表現を用いています。

イエス・キリストは別の点でも父であります。福音を受け入れた人々は、主との新たな関係における養子縁組と誓約により、イエスを父とするのです。アビナダイはこの関係に触れて、予言者とその言葉に聞き従う人々を「御子の後裔」と呼んでいます。(モーサヤ15:10-13参照)ベンジャミン王も悔い改めたニーファイの民に向かい、この関係を明らかにしました。「お前たちの結んだ誓約のためにお前たちはキリストの子と呼ばれ、キリストの息子や娘と呼ばれる。それは今日キリストがお前たちの精神を新に生みだもうたからである。お前たちはキリストの御名を信するから自分の心が改まったと言う。従って、お前たちはキリストにより生れてその息子や娘となった。」(モーサヤ5:7)このように、イエス・キリストは養子縁組により、義人の父とされるのです。

イエス・キリストが父であるもうひとつの理由は、イエスには永遠の御父を代表する権能が授けられていることです。復活したキリストはニーファイ人に向かって、御父と御子とはひとつの神会をなすので、御子のみ名によって御父に祈れ、と教えておられます。(IIIニーファイ20:31,35参照)パレスチナの弟子たちにも、「わたしと父とは一つである」と教えられました。(ヨハネ10:30)しかし同時



に、「父がわたしより大きいかたであるからである」(ヨハネ14:28)、「わたしは父の名によってきた」(ヨハネ5:43)と述べておられます。

#### 神は霊のお方か

モルモン経を読む人の中には、神を「大霊」と呼んでいるふたつの聖句に関心を持つ人がいます。しかしここでも、それらの聖句の背景を理解することが大切になります。

アンモンがレーマン人の王ラモーナイを教えたときの様子が、次のように描かれています。「アンモンは……まず、王は神のましますことを信ずるかとなすねた。

王は答えて「われはそれが何のことだかわからない」と言った。

そこでアンモンは、王は大霊のあることを信ずるかと聞くと、

王が『その通り大霊は信ずる』と答えたので、

アンモンは、大霊はすなわち神であると言〔つ〕た。」(アルマ18:24-28)

次は、アンモンの兄弟アロンが、ラモーナイの父の王を教えている場面です。「王はまた『神とはわれわれの先祖をエルサレムの地から導き出したあの大霊であるか』となすねたので、

アロンは王に答えて『その通り、あの大霊のことであって、その方は天地にあるすべてのものを造りたもうた……』と言った。」(アルマ22:9-10)

アンモンとアロンは、それぞれの状況の中で、神に関する王たちの定義を単に受け入れたに過ぎません。王たちが基本的な真理を幅広く学んで、さらに詳しい知識を理解できるようになるまでは、それで十分であると考えたからです。

では、このふたりの宣教師は誤った教義を教えたのでしょうか。そうではありません。どちらの王も、「大霊」が天と地にある万物の造り主イエス・キリストで

ジェレドの兄弟はまだ肉体を受けていないキリストの霊体を見ました。

ある、と教えられています。当時、エホバとして知られていたイエス・キリストは、まだ肉体を受けていない霊のお方でしたから、万物の創造主、「大霊」と呼ぶこともできたのです。

ただしモルモン経は、神が霊の存在であるとする見解を一掃し、御父と御子が肉体を持つお方であるという教義を明らかに宣言しています。たとえば、ジェレドの兄弟は、まだ肉体を受けていないキリストの霊体を見ましたが、そのとき主は次のように言われました。「汝らがわが形にかたどりにて造られたることを今汝は見ずや。最初に一切の人々はわが形にかたどりにて造られたり。

見よ、今汝が見るこの体はわが霊体なり。われはわが霊の体にかたどりにて人現わると同じ形の肉体を具えてわが民にもまた現われん。」(イテル3:15-16)

それから2,000年後に、エホバはその霊に肉体をまとしてこの世に誕生されました。こうして、「人がはじめに造られた形と同じ……神の形」を受けられたのです。(モーサヤ7:27)

復活したキリストは、エルサレムとアメリカ大陸の弟子たちを訪れたとき、ご自身の脇腹に手を差し入れるように、また手足にある釘跡に触れるようにと言われました。(ヨハネ20:27; IIIニーフアイ11:14参照)そしてニーフアイ人への訪れが終わりに近づいたとき、すでに復活体となった主は「われは今御父のもとへ行く」(IIIニーフアイ27:28)と言われました。

モルモン経は、書き記すことのできた事柄の「百分の一」も取められていない抄録版ですが(モルモン言1:5参照)、神会に関する正しい教義を含め、イエス・キリストの完全なる福音が取められているのです。

# 遅すぎる ことはない

七十人第一定員会会員  
ジョン・K・カーマック

それは金曜日の晩で、しかも韓国のソウル市にある合衆国第8陸軍司令部の給料日でした。私は日中ずっと任務についていたので、夜は読書をしたり、手紙を書いたり、自分の好きなことをして時間を過ごしていました。

給料日は大歓迎なのですが、兵隊の中には、特別手当の現金をクラブで浪費して大騒ぎする者がいました。その晩も就寝時間が近づいた頃に、酔っぱらった3人の兵隊が、騒々しく営舎に入ってきました。

陸軍の粗末な施設は、第2次世界大戦以前に日本の占領軍が建てたものでした。その兵隊たちが部屋に入ってきた途端、それまでの平安と静寂はどこかへ消えてしまいました。私は騒々しい侵入者から顔を背けると読書を続け、一変した部屋の雰囲気を見捨てることにしました。

ひとりで静かにしていたと思っていたところ、3人の中で背が高く顔だちのよい兵隊が私を仲間に入れようと、よろけながらベッドの方に近づいて来ました。「何を読んでいるんだ?」「ジョン・スチュアート・ミルの伝記だよ。」そう答えながら顔を上げて相手を見た途端、その兵隊がアルマ・アンダーソン(仮名)であることがわかりました。小さいけれど

互いに気心の知れたソウルの教会で、一緒だった男です。アルマも私に気づいたようでした。

アルマは、ひどく取り乱した様子で背を向けると、私から離れようとしていましたが、反対に私の方へ倒れ込んでしまいました。「アルマ、2、3カ月前のグループ集会で君を見かけたよ。」

「ああ、覚えてるよ。」アルマは気乗りしない様子で答えましたが、戸惑いが顔に出ていました。そして突然こう言ったのです。「教義と聖約を知ってるだろ。知恵の言葉を読んでくれないか。」私は教義と聖約を取り出すと第89章を開けて、「強き飲料は腹のためにならず」(教義と聖約89:7)という節を含めて、知恵の言葉として知られる啓示を一語ずつ、ゆっくりと大きな声で読みました。

「こんなこと、まだましな方さ。知ってのとおり、おふくろはおれが伝道に出ると思ってるけど、もうだめだ。」

私は口をはさんで言いました。「アルマ、君はまだ伝道に出られるよ。どうすればいいか知りたいと思わないか。」

「罪深いこのおれが伝道に出られると本気で思ってるのか。やってはいけないことをすべてやってきたんだ。伝道に出るには遅すぎるのさ。」

私は教義と聖約を取り出すと第89章を開けて、知恵の言葉として知られる啓示を一語ずつ、ゆっくりと大きな声で読みました。



私には、「すべてやってきた」という言葉の意味がよくわかりました。夜になると、基地の中には同僚たちの姿があまり見られなくなります。彼らの興味は別の場所へ向けられるからです。アルマも同じことをしてきました。しかし、ほとんどの教会員はこうした夜遊びには加わりませんでした。

アルマは翌週帰国することになっていました。私は、彼が犯してきた罪と、救いにかかわる福音の計画を十分に理解したうえで、自信を持ってこう断言しました。「大丈夫、君は伝道に行ける。でも簡単なことではないよ。」

私は教義と聖約第58章42-43節を開いて悔い改めについて読み、重大な罪は神権指導者に告白しなければならないことを話しました。そして、カリフォルニアに着いたらすぐに監督のところへ行くように勧めました。そうすれば、悔い改めの過程を続けて踏んでいけるに違いありません。

さらに、重大な性的罪を捨てることと、二度と同じ罪を繰り返さないことを、今すぐ決心するように強く勧めました。また、悔い改めには長い時間がかかるので忍耐が必要であることを強調し、彼の罪が主の目から見てどんなに重大なものであるかを理解するために、アルマ書第39章を読むように提案しました。最後に、悔い改めの一部として、今から生涯にわたって同胞に奉仕するように計画しなければならないことを説明しました。そして救い主の憐れみと贖いについて話し合い、どんなに重大な罪を犯していても主から忘れ去られることはないという点を確認しました。私は次のような慰めの言葉をかけました。

「だれでも罪を犯すことはあるし、救い主のすばらしい憐れみがなかったら道に迷ってしまう。だから、キリストの血によって清められるように、罪を悔い改めなければならないんだ。アルマ、明日は土曜日だ。夜は一緒に過ごそう。そして日曜日に教会の礼拝に行きたくなったら、朝の8時にここにきてくれ。」アルマは両日とも来ることを約束して、そのとおりにしました。日曜日は神妙な態度で、終日私と共に過ごしました。私たちは霊の糧を豊かに受け、アルマの中には希望

あなたがもし主のみ業に戻りたい、  
ふさわしくなりたいと望むなら、  
決して遅すぎることはありません。  
主は憐れみ深く、やさしいお方です。

のよみがえる兆しが見えてきました。それから数日間のすばらしい軍隊生活を終えて、アルマは所属のユニットへ帰ることになりました。

月曜日に、アルマは別れのあいさつをしに来ました。それから、仁川（インチョン）港で待機していた輸送船に乗って太平洋を渡り、合衆国へ、そして彼の誇りとする家族のもとへ帰って行きました。私はアルマのことを思い出しては、その後どうなったか心配していました。そんなある日、次のような手紙が届きました。

「親愛なるジョンへ」

私のことを覚えてくれていると思います。付き合いは短かったけれど、君は私の人生にいつまでも消えない影響を与えてくれました。これからもうさうだと思います。どうしてあの晩君に話しかける気になったのか、今考えても不思議です。でも、そのことにとても感謝しています。あの晩語り合ったことが、人生のひとつの転機になりました。あれから生活は良い方向に変わってきたからです。

私は、最善の生き方がやさしくはないことを知りました。でも今では、末日聖徒としての生活に大きな喜びを感じています。カリフォルニアに戻るとすぐに、監督と話をしました。数カ月後には、十二使徒評議員のヒュー・B・ブラウン長老から伝道の面接を受け、「過去の過ちを償うために、たくさんのことを期待されています」とはっきり言われました。面接を終えたとき、私の心は強い決意にあふれていました。土曜日に伝道の召しを受けて、すぐに伝道本部へ行きました。生まれ育った州から一歩も出ないのですが、この召しを本当に喜んでます。

あの晩、君から励ましと助言を受けたことを心から感謝しています。あのときはあまり良い気持ちはしなかったけれど、

君の言葉は忘れません。おそらく、君との出会いは導きだったのでしょう。本当にそう思います。君の助けに心から感謝しています。これからの人生がさらに幸福なものとなるよう祈っています。

そちらの近況を是非知らせてください。君からの手紙を待っています。

お元気で、

福音における兄弟より」

この手紙を読みながら、アルマの悔い改めを助けるために、ふさわしい時に、ふさわしい場所に私が遣わされたことがよくわかりました。主のみ業は常に人を通して、すなわち神の息子や娘を通して成就されます。私の受けた報いは、純粋な心からの喜びでした。

次にアルマに会ったのは（それが最後でしたが）、ロサンゼルス神殿でエンダウメントのセッションが始まるのを待っているときでした。そこへアルマが入って来たのです。私たちは懐かしい軍隊時代の友人として、いやむしろ、永遠の友として、しっかり肩を抱き合いました。アルマは伝道が成功したことを手短かに話してくれました。伝道は決して簡単なことではなかったでしょうが、専任宣教師としての召しを果たしたことに誇りと喜びを感じている様子でした。かつてアルマは、もう遅すぎると思っていましたが、決して遅すぎることはなかったのです。

教会のすばらしい若人の皆さんに、はっきりとお伝えします。皆さんがもし主のみ業に戻りたい、ふさわしくなりたいと望むなら、決して遅すぎることはありません。主は憐れみ深く、やさしいお方です。もちろん、重大な罪を犯している場合には、罪を犯したことを認めて苦しみ、告白し、償いをし、忍耐し、生涯奉仕するという決意をするなど、苦痛の伴う幾つかの負債を支払わなければなりま

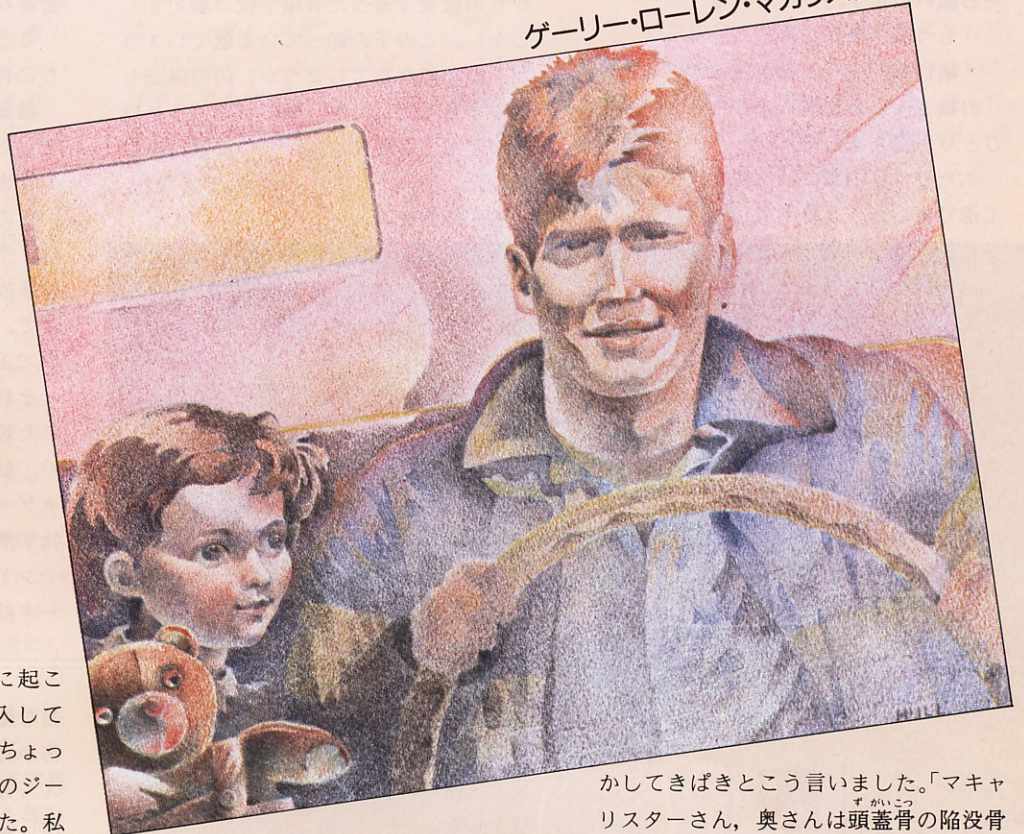
せん。一番よいのは、霊の暗黒をもたらすようなことに決して手を染めないことです。「主なるわれは罪を見ていささかもこれを許すを得ざればなり。さりながら、悔い改めて主の誠命（まことのみことば）を行う者は赦されん。」（教義と聖約1：31-32）たとえ罪があっても、主は皆さんを愛しておられるのです。

若人の皆さん、私たちには皆さんが必要です。どうぞ主に仕えてください。克服しなければならぬ重大な罪のある人は、心に痛みを覚え、つらい経験をすることになるかもしれません。しかしそれでも、伝道に出たことを後悔しないでしょ。皆さんの助けでだれかが罪を認め、主への信仰を願ひ、悔い改めてバプテスマを受けるとしたら、そのときの喜びは、過去の苦しみや苦勞を補って余りあるに違いありません。皆さんが人々の生活に徐々に注ぎ込む祝福は、やがて永遠のものとなって、皆さんの生活にも喜びをもたらすでしょう。そしてその喜びがさらに喜びを生んで、決して尽きることがないでしょう。

さあ、悔い改めて、主に仕えるために戻ってきてください。主はあなたを愛しておられ、教会はあなたを必要としています。誤ったプライドを捨てて、今すぐに悔い改めの道を歩むために、監督や支部長と面接の約束をしてください。あなたはその報いとして、「この世に在りては平和を得、次の世に在りては永遠の生命を得」るでしょう。（教義と聖約59：23）皆さんの中には、犯した罪の重さや罪悪感のために、あるいは悔い改めた人を赦したいと望んでおられる主の思いを理解していないために、希望を失い、伝道をあきらめた人が少なくないと思います。私は心から申しあげます。決して遅すぎることはありません！

# 救いの歌

ゲーリー・ローレン・マカリスター



その事故は、町を出たときに起こりました。新しい家を購入して書類にサインし、妻の祖母の家にちょっと立ち寄ったあとのことで、3歳のジージェイは後ろの座席で寝ていました。私たちは、残してきた3人の子供が待つ家へ一刻も早く帰りたいという気持ちでいっぱいでした。妻のゲイドラは編み物を始めていて、ふたりともシートベルトのことをすっかり忘れていたのです。夕方の5時近くでした。

道路は込んでいましたが、時速90キロ近く出ていました。交差点に近づいたとき、反対方向から来た車が私たちの前で突然曲がろうとしたのです。とても無理でした。左右の車線にも車が走っているので、よけようがありません。急ブレーキをかけたのですが、間に合いませんでした。

車は正面から衝突して、私はハンドルとフロントガラスにたたきつけられました。あえぎながら、必死で妻の名前を呼びました。床に倒れている姿が見えましたが、返事がありません。血が流れて目に入ってきました。変形したハンドルを蹴りあげて足を引き抜こうとしたとき、娘の泣き声が聞こえてきました。ガソリンが漏れて引火すれば、車は爆発します。妻と

娘を早く安全な場所に移さなければなりません。

ようやくドアを開けて立ちあがると、頭がクラクラして目の前が真っ暗になりました。壊れたラジエーターから漏れた水が足下を流れるのをかすかに見て、ひざから力が抜けていくのを感じながら、その場に倒れました。

意識を取り戻したとき、私は道路わきの芝生に運ばれて行くところでした。妻子のことを尋ねると、心配はないという返事でした。娘の泣き声がまだ聞こえていました。

救急車が到着すると、妻と私と相手の車の運転手が担架で後部に乗せられ、娘のジージェイは、救急隊員と一緒に前の座席に座りました。妻は何度か、起きあがって娘の安否を尋ねようとしたのですが、そのたびに意識を失って倒れました。

病院に着いたとき、娘は泣きやんでいました。医師が救急処置室に入って来て、私を診察し、看護婦に指示を与えて出て行きました。その看護婦はやさしく、し

かしてきばきとこう言いました。「マカリスターさん、奥さんは頭蓋骨の陥没骨折です。脳がひどく圧迫されていますので、ヘリコプターで大学病院に運んで手術をします。触れてみると、骨折しているのがわかるんです。あなたは大丈夫ですから、奥さんに付き添ってヘリコプターに乗れるでしょう。」

看護婦は部屋を出て行きました。壁の時計を見ると、5時20分です。辺りはひっそりと静まりかえっていました。

私は叫びました。「ああ、天のお父さま、どうか、ゲイドラを助けてください。死んではならないんです。死ぬはずがないんです。」涙があふれて、まぶたの周りの傷口が痛みました。眉毛と額の辺りにガラスの破片が刺さっているのがわかりました。このときほど、つらい思いをしたことはありません。永遠の恋人を失うかもしれないのです。

ふと気がつくと、そばにだれかが立っていました。白衣ではなく、普通の背広を着た男性がふたり、私にあいさつをしました。教会の長老でした。

ひとりが尋ねました。「祝福をしましよ

うか。」

「ええ、お願いします。それから、妻が放射線科にいます。どうか妻にも祝福をお願いします。」

「もう済みましたよ。」

「娘にも……」と私が言いかけると、「お嬢さんにも祝福しました」と、もうひとりが答えました。

ふたりは私の頭に油を注ぎ、祝福をして帰りました。5時半でした。

私は不思議に思いました。あの長老たちはだれなんだろう。どうしてこんなに早く、病院に来られたんだろう。

その訳は、あとになってわかりました。

救急車を運転していた二十歳の隊員は、ハンドルから手を放せませんでした。その隊員が、おびえて泣き叫んでいる3歳の女の子に、何をしてあげられたでしょうか。両親がけがをし、それも母親は重体です。何と言ったら、あるいは何をしたら、この子を慰められたでしょうか。

その隊員は、歌を歌ってみようと思いました。でも、子供の歌が浮かんできません。ひとつありました。最近入ったばかりの教会で習った日曜学校の歌です。しかし、この子の知っている歌でしょうか、慰めになるでしょうか。何の保証もありませんでしたが、歌おうという気持ちだんだん強くなり、ついに歌い出しました。「神の子です、わたしやあなた。いろんなお恵み……」

女の子は泣きやみました。そして1番が終わると、一緒に歌い始めました。「神の子です、わたしやあなた。みことば正しく……」

2番を歌い終わると、隊員はやさしく聞きました。「末日聖徒なの？」

「うん。」

「お父さんとお母さんも？」

「そうよ。」

隊員はすぐに無線機を取りました。「緊急呼び出し。緊急呼び出し。やあ、ベス。

電話帳でブロー監督という人の番号を調べて、連絡をとってこないか。今運んでいる重傷の女性が、その人の教会の会員なんだ。そして……」

こうして監督は連絡を受け、数分のうちに神権者が病院に駆けつけたのです。

結局、妻は大学病院には運ばれませんでした。レントゲン撮影の結果、頭蓋骨の骨折はなかったからです。娘と私はその夜のうちに帰宅を許され、2週間後には、手術もせずに妻が退院しました。妻は事故とその後数日間の記憶を失っただけで、全快しました。私たちは時速90キロで正面衝突して助かったのです。

それから1年後に、妻の命を救ってくれた若い救急隊員が伝道に出ることになり、私たちも彼の歓送会に出席しました。  
\*ゲアリー・L・マキャリスターは、生物学準教授で4児の父である。現在、グランドジャンクション・コロラド西ステーク部の伝道部長を務めている。

## 聖・職・者・の・権・能

ビクター・W・マシューズ

何年も前のことですが、私の兄弟のリロイ・E・マシューズは家族と一緒に、州立病院のある町に住んでいました。

ある日、ロイ（リロイの愛称）は病院長の部屋に呼ばれて、簡単な面接を受けました。院長はこのように言いました。「熟慮を重ねた結果、あなたに来年度の当病院専属の牧師を務めていただくことに決まりました。」さらに院長は説明しました。「地元の各教会の牧師を毎年順番にこの責任に任命するのが、長年にわたる病院の方針なのです。」町の住民のおよそ半数は末日聖徒でしたが、これまでに任命された人は、いずれもほかの教会の牧師だったのです。

ロイは院長に言いました。「光栄に思います。喜んでこの責任を引き受けさせていただきます。」

ところが、それから数日後、ロイはまた病院長の部屋に呼ばれました。地元の牧師たちがロイの任命に反対しているのです。反対の理由は、ロイ・マシューズの人格に関する事柄ではなく、ロイが「正当な権能を授けられた聖職者ではない」という点にありました。

院長はロイに尋ねました。「あなたが正

当な聖職者であることを証明する書類を何かお持ちではありませんか。」ロイは答えて言いました。「家に帰って、1時間以内に必要な書類を持ってきましょう。」

程なくして戻ってきたロイは、自分の神権の系譜が記されたカードを院長に手渡しました。そこには、ロイが聖任を受けるまで、代々神権を継承してきた兄弟たちの名前が書いてありました。院長は丹念にそれを読むと言いました。「ロイ、あなたの権能は、私たちの主にまでさかのぼると言うのですか。」

「そうです、院長。そのとおりです。」

院長は喜びと驚きの入りまじった表情で、カードを2、3日貸してもらえないかと尋ねました。もちろん、ロイは承諾しました。

週末に再び院長から呼ばれて、次のような説明を受けました。「私は牧師たちに会って、あなたの神権の系譜を読んで聞かせました。そして、それに匹敵するものを持っているかどうか尋ねてみました。ところが返ってきたのは、神学校で教育を受けて任命されたという答えだけだったのです。」

ロイはそれ以上の反論や反対を受けることなく、その責任に任命されたのでした。



不可能に思える任務に直面したとき、私たちはどうするでしょうか。

だれでも障害に出会うことがあります。また、むずかしい局面を迎えることがあります。私たちが歩んでいる道は、自力では到達できないと思える高地へと続いていますから、だれもが遅かれ早かれ、とても登れそうにない絶壁の下に立つことになるのです。

1895年、私の曾祖父にあたるアピナダイ・オルセンは、サモア諸島への伝道に召されました。曾祖父は予言者からの召しに従い、ユタ州キャッスルデールの町に妻と4人の幼い子供（その中のひとりが私の母方の祖母チェイスティ・マグダリン）を残して出かけました。そして、汽車と船を乗り継ぎ、26日間かけてサモアのアピアにある伝道本部に着きました。最初の任地はツツイラ島でした。

曾祖父はそこで、「草ぶきの掘っ建て小屋」と自分で呼んだ家に住み、慣れない食物を食べ、重い病気に悩まされ、サモア語と悪戦苦闘しながら、数週間過ごしました。しかし、伝道の成果はさっぱり上がらなかったようです。失意とホームシックに陥った曾祖父は、船でアピアに戻ろうかと本気で考えました。伝道部長に会って、これ以上サモアで時間を無駄にしたいと訴えたかったのです。伝道の障害を克服するのは困難に思われ、伝道中の自分を支えるために苦勞している妻子のもとに、早く帰りたいと思いました。

曾祖父はそのときの経験を、帰還してから数年後に、ある友人に話して聞かせました。「そしてある晩のことだ。掘っ建て小屋の床に敷いたむしろで横になっていると、見知らぬ男が中に入ってきて、『起きてついて来い』と言うんだ。その男の態度には、有無を言わせないものがあった。男は私を外へ連れ出すと、村を抜けて、切り立った崖の下に案内した。

『おかしいな、こんなところに崖なんかなかったはずだが……』と考えていると、男が言った。『この崖を登ってもらいたい。』私は崖にもう一度目をやり、うろたえて答えた。『できません。無理ですよ。』

『どうして無理だとわかるんだ。登っ

てみようともしないで。』

『だって、だれが見たって……』私が抗議しようとする、男はそれを遮って言った。『さあ、登るんだ。手を伸ばして、ほら足をかけて。』

私は逆らうことができず、命じられるままに手を伸ばした。するとその固い壁面にくぼみがあるらしく、そこにつかまることができた。次に片方の足を上げると、つま先をかける場所があった。

『さあ、どんどん登れ。もう一方の手も伸ばすんだ。』言われたとおりにすると、またくぼみに手が届いた。そして驚いたことに、切り立っているとばかり思っていた崖が、しだいに緩やかになって、楽に登れるようになっていないか。私は苦もなく登り続けていった。そして、ついに……と思った瞬間、自分が掘っ建て小屋のむしろの上に寝ていることに気づいたんだ。見知らぬ男も消えていた。



# 手を伸ばして 登りなさい

十二使徒定員会会員

ダリン・H・オークス

私は、どうしてこんな経験をしたのか考えてみた。そしてすぐに悟った。その3カ月間というもの、私は心の中で、崖の前に立ちつくしていたんだ。その崖に登るために、手を伸ばそうともしなかった。言葉を覚え、いろいろな問題を克服するために、当然払うべき努力をしていなかったんだ。」(フェントン・L・ウィリアムズ『不可能を可能に』「インクルーブメント・エラ」1957年8月号、p. 554)

アビナダイ・オルセンが任地を離れなかったことは、言うまでもありません。3年半の間伝道をして、正当な権能を持つ人から解任されました。宣教師として立派な業績を残した曾祖父は、忠実な教会員として余生を送ったのです。

私たちは義に基づく責任を果たしているときでさえ、克服するのが不可能に思える障害に直面します。しかし、そのようなときには思い出してください。主のみ業に携わっている限り、私たちを支えている力で克服できない障害はないのです。手を伸ばして登らなければなりません。手を伸ばさなければ、つかむ場所はわかりませんし、足で探らなければ、足場は得られないのです。

「奇跡に先駆ける信仰」とよく言われます。また、個人の努力が奇跡をもたらすことも知られています。スペンサー・W・キンボール大管長のこうした言葉から、あの名高いメッセージが伝わってきます。「さあ、前進しよう！」

聖典に数多くの実例が記されていますが、主は、不可能な業に取り組む人々を祝福してください。主にとって不可能なことは何もありません。

モーセに導かれてエジプトを出たイスラエルの民は、紅海のほとりに野営しました。エジプト人はそれを見て、追い詰めたと思いました。パロの軍勢が前から迫ってきます。後ろは海です。モーセは民に向かって言いました。「あなたがたは恐れてはならない。……主があなたがたのために戦われる。」(出エジプト14：13-14) 主はモーセにお告げになりました。

「イスラエルの人々に語って彼らを〔海に〕進み行かせなさい。」(出エジプト14：15) 人々が進んで行くと、モーセは命じられたとおり、自分のつえを海に向かって差し伸べました。こうしてイスラエルの民は、海の乾いた地を渡って行ったのです。(出エジプト14：16, 22) 彼らは信仰をもって前進しました。その結果、不可能に思えたことが起こったのです。

ジェレドの兄弟は、民が造った密閉型の船に、どのようにして明かりを取り入れるかという問題に直面しました。そこで、主に問題を解決していただくとしたところ、逆に主から次のような質問を受けました。「汝らはその舟の中に光のあらんため、われに何をせられんことを願うか。」(イテル2：23) ジェレドの兄弟は、みずから問題を解決するために、透明な16個の石を溶かし出しました。そして大いなる信仰をもって、主に嘆願しました。「この石に主の指を触れて暗やみの中に光を出す石となしたまえ。さらば、そは……海を渡る間われらの所を照す。」(イテル3：4) その祈りは答えられました。信仰ある人の率先した働きと、神の祝福と力によって、問題が解決されたのです。

ニーファイは、エルサレムに戻ってレバンの神聖な記録を持ってくるように命じられたとき、方法はわからなくても必ずできるという信仰をもって、出かけて行きました。ニーファイはこう言っています。「私は、主が命じたもうことには、人がそれを為しとげるために前以てある方法が備えてあり、それでなくては、主は何の命令も人に下したまわぬことを承知しているからである。」(I ニーファイ3：7) ニーファイは、その信仰とみずから進んで行動することによって、使命を全うしました。そのお陰で、幾世代もの人々が祝福にあずかることができたのです。

神の戒めを守り、その教えに従う人々にとって、不可能なことは何もありません。しかし、私たちがまず努力をしなければ、障害を乗り越えるために必要な祝福は与えられません。努力の後に祝福がもたらされるのです。リーハイの一行を導くためにリアホナが与えられたのは、エルサレムにいたときではなく、何年か荒野を旅した後のことでした。イスラエルの陣営(教義と聖約第136章参照)を組織するように主から命令が下されたのは、ノーヴーにおいてではなく、聖徒たちがそこを追われて1年近くたち、現在のオマハに近いミズーリ川の西岸にいたときのことでした。

義に基づく責任を果たしているときに、障害に直面したらどうしますか。そうです。手を伸ばして登るのです。問題を解決し、障害を乗り越えるために必要な祝福は、積極的に問題と取り組む人々に与えられるのです。

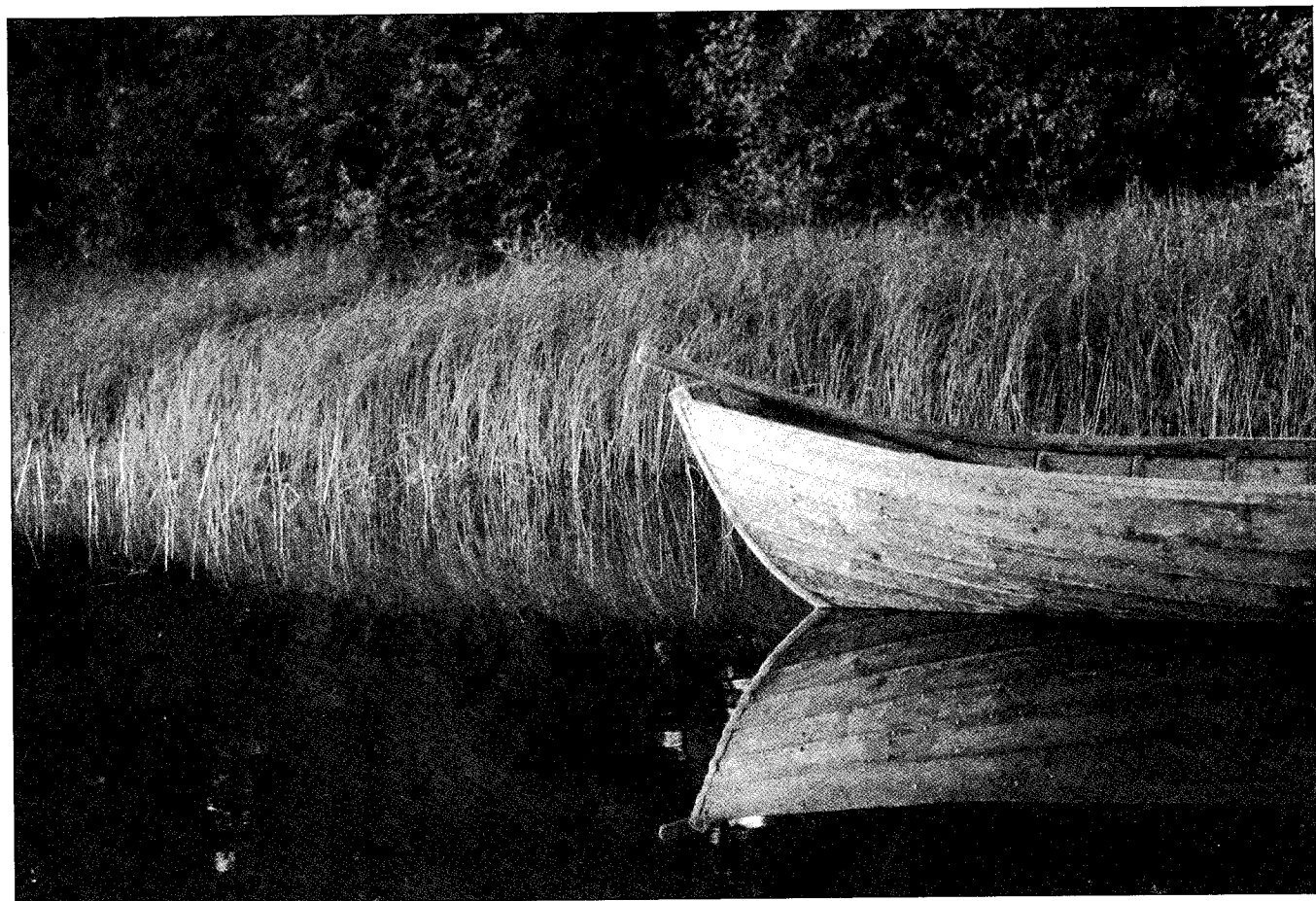
| 澁 | 谷 | ブ | ッ | ク | セ | ン | タ | ー | か | ら |

「聖典からの物語」 21×26.5cm ハードカバー  
272ページ 1,000円

— 見るから読むへの第一歩 — **好評発売中**

- 「天上の大会議」から「ジョセフの最初の示現」まで、旧・新約聖書、モルモン経を主体に、年代を追って54の物語を収録。
- 85点にも及ぶさし絵(カラー54点を含む)は、一つ一つの物語を一層楽しいものになっている。
- 小学生から理解できるように、表現を平易にし、すべての漢字にふりがなを付した。また難解な用語には脚注を施し、巻末に索引を設けている。年表付き。
- 「モルモンけいものがたり」や「新約聖書物語」などの見る絵物語から、一歩進んだ読むための物語である。





証

キャロライン・パッカー

「福音は真実です」と  
 かすれた声  
 ほほに光る  
 涙のしずくを  
 弁解しつつも  
 感動に  
 声をつまらせ  
 言葉を続ける  
 「神は生きておられます  
 私は知っています」と  
 大の男が  
 泣くのを見て

とまどいながら  
 「めめし奴」と  
 肩をすくめる会衆もいる  
 でも私は  
 ほほえむ  
 そして、輝く涙と  
 ふるえる心で  
 彼を見つめる  
 なぜなら  
 私も弱い人間と  
 知っているから

「汝ら、われと同じ業に働く僕らよ。  
救世主の御名によりて、  
われ汝らにアロンの神権を授く。  
こは天使の導きと恵み、悔改めの福音、  
罪を赦すために水に沈むるバプテスマ  
などの鍵を握る神権にして、  
まことにレビの子孫が主の御前に  
再び義しきに適いて捧物を捧ぐる時まで、  
この世より決して再び  
取り去らるることなし。」  
（教義と聖約第13章）



# 永遠の生命を 得るには

アジア地域会長会第一副会長  
ヤコブ・ディヤガー

**教** 会員になると、私たちは生活の  
うでで大きな変化を経験し、日々  
新たなチャレンジに直面します。興味深  
いことに、私はステーキ部大会の訪問先

で、昇栄、つまり永遠の生命を得るには  
何を必要とするのか、大勢の教会員  
から質問を受けます。

そこで何が昇栄の土台となるのか示し  
た表を、ここに紹介したいと思います。

この表が多少でもそのような質問への答  
えになればと願っています。どのような  
男性も、女性も、次にあげる土台を持た  
ずに、そうした高められた状態に到達す  
ることはできません。啓示、聖典に対す

## 個人と家族の昇栄

昇栄の土台	昇栄を得るための 個人の責任	家庭での父親の 義務と責任	教会が行なう援助
啓示	予言者やそのほかの神権指導者にもたらされた啓示を受け入れると同時に、 <u>個人の啓示</u> をも求める。	<u>個人の啓示</u> を受け、家族にもそれを受ける方法を教える。	信仰箇条第9条を実践するように教え、励ます。
聖典	聖典の中の教えと戒めを調べ、それらに <u>従う</u> 。	家族の祈りを定期的に行なうように <u>教え</u> 、指導する。また、家族と一緒に聖典を学ぶ。	神権会や日曜学校で、純粋な教義と正しい原則を教える。
神権	各人が聖なる神権を受け、それを <u>尊ぶ</u> 。	息子が神権を受けられるように、また、 <u>家族が神権を尊ぶ</u> るように準備させる。	神権者を見守り、共にあって彼らを強める。
神聖な諸儀式	神聖な儀式を受け、交わした誓約を <u>誠実に守る</u> 。	神殿の儀式を受けられるように家族を備え、そこで交わした誓約を <u>忠実に守る</u> 。	悔い改めて個人的にふさわしくなるように励ます。また、ふさわしさを判断する。
個人の才能と賜を伸ばす	人々を教え、強める賜、また、奉仕する神聖な賜を <u>伸ばす</u> 。	<u>奉仕のためにみずからの才能と賜を伸ばす</u> ように家族を助ける。	一人一人に、奉仕のための機会と励ましを与える。
戒めを守る	神の戒めに <u>従って</u> 、これを <u>守り</u> 、終わるまで <u>堪え忍ぶ</u> 。	戒めを守るように、 <u>愛の精神</u> をもって家族全員を励ます。	聖餐会、ステーキ部大会、総大会などで会員に向けて話をする。

る十分な知識、男性と女性の双方にもたらされる神権の祝福（女性は神権を与えられませんが、神権のもたらすすべての祝福にあずかることができます）、神聖な諸儀式、個人的な才能や賜を伸ばすこと、そしてもちろん、戒めを守ることがあげられます。

さて、昇栄について考えてみますと、これは常に個人的な事柄であることがわかります。しかし、もし恵まれて末日聖徒の家庭を持っているならば、父親は家族を強めるために、自分の義務と責任を果たすことができます。この点について

も先の表で採りあげました。さらに、教会も、神権組織や補助組織を通して個人が永遠の生命を得られるように援助できることは、言うまでもありません。

末日聖徒イエス・キリスト教会の使命のひとつは、聖徒を全き者とすることです。教会の初期の頃、ジョセフ・スミスはなぜあのように完全に民を治めているのか質問を受けた折、後世の模範となる答えを残しました。「私は人々に正しい原則を教え、人々にみずからを治めさせる。」ですから、末日聖徒の課題は、最良の書物を通して主の方法をできる限りたくさ

ん学ぶことにあります。

このメッセージが、聖徒を全き者とするために正しい原則を教えるうえで、いくらかでも役立つように祈り、願っています。

イエス・キリストの福音の律法と儀式に従い努力することにより、救いと昇栄が得られることを証いたします。また、これは御父のみ前に戻るためにすべての人々に与えられた責任であることを証いたします。以上のことをイエス・キリストのみ名によって証いたします。アーメン。



## アジア地域

### フロンティア—— 新たな宗教的伝統を 築く開拓者の地

●アジア地域会長会(左よりヤコブ・ディヤガー第一副会長、ウィリアム・R・ブラッドフォード会長、キース・W・ウィルコックス第二副会長)

アジアは教会の中で「最も人を引きつけ、発展の速い、取り組みがいのあるフロンティアの地」に数えられる。これは地元からの宣教師が次々と送り出されていく中で、明日への土台が築かれているからである。

戦後、日本伝道部が開設されてから、アジアは教会にとって冒険に満ちた、しかし報いの大きい開拓の地となった。こう語るのはウィリアム・R・ブラッドフォード長老である。アジア地域会長会は事務局を東京に置き（7月からは香港に移転する）、日本はもとより、韓国、台湾、香港、タイ、フィリピン、ミクロネシア、グアム、インドネシア、マレーシア、シンガポール、スリランカ、インド各国の伝道部ならびにステーク部を管理している。

ブラッドフォード会長は、副会長を務める七十人第一定員会会員のヤコブ・ディヤガー長老およびキース・W・ウィルコックス長老と共に、75のステーク部と23の伝道部の管理に当たっている。1949年にはわずか数名を数えるだけであったこの地域の教会員が、現在では25万人以上を擁するまでになった。

「これは、ブリガム・ヤング大管長が亡くなった1877年当時の3倍以上にあたります。」ヤコブ・ディヤガー副会長はそう語る。

ブラッドフォード会長の話によれば、アジアの会員の大半は、親が教会員でない人たちである。

教会幹部に召される以前、ワシントン神殿の設計者グループのひとりであったキース・W・ウィルコックス副会長は、

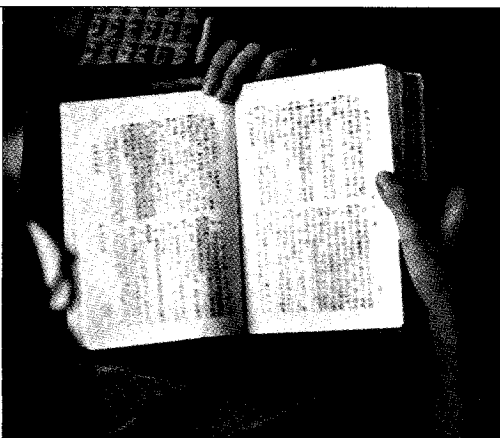
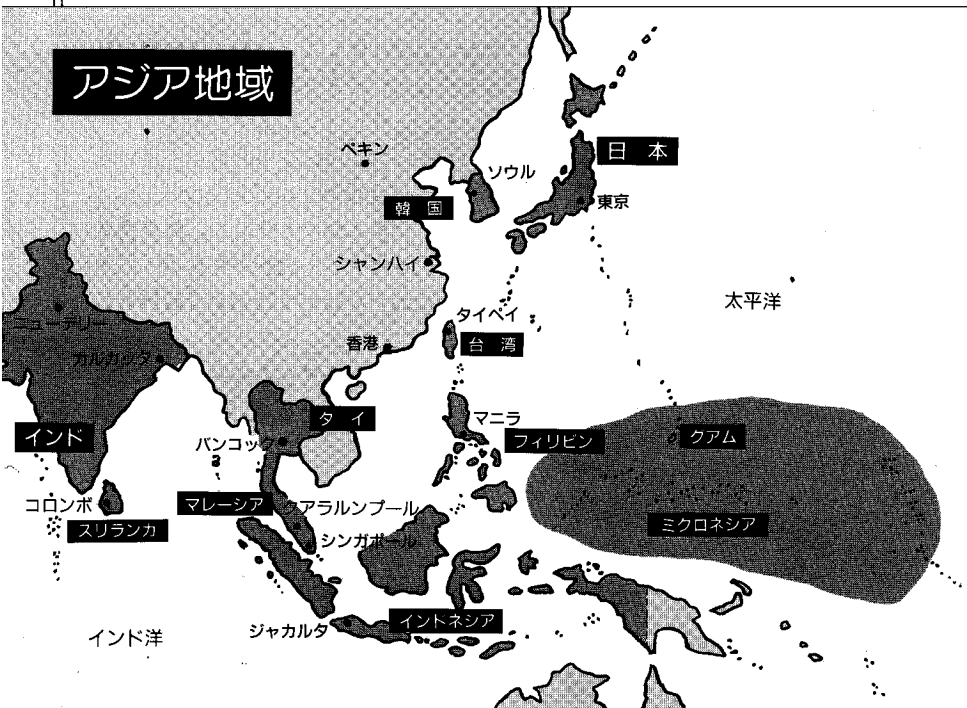
次のような話を聞かせてくれた。「今アジアでは、日本、台湾、フィリピン、韓国の4カ国で神殿が業務を行なっていますが、その神殿職員のほとんどが、地元の教会員です。」

さらに、この地域には現在3,000人の専任宣教師が伝道に従事しており、その内の約半数はアジアの出身である。「こうした地元の宣教師たちは、将来に備えて指導者としての素地を築いているのです。」ブラッドフォード会長はこう付け加えた。事実、地元の聖徒たちはすでに指導的な立場にあって働いている。

フィリピンでは教会が非常に速さで成長している。この国の伝道部は、世界中で最も成功を収めている伝道部の中に数えられる。昨年（1985年）1年間だけでも、フィリピンにある4つの伝道部を合

# チャーチニュース

## アジア地域



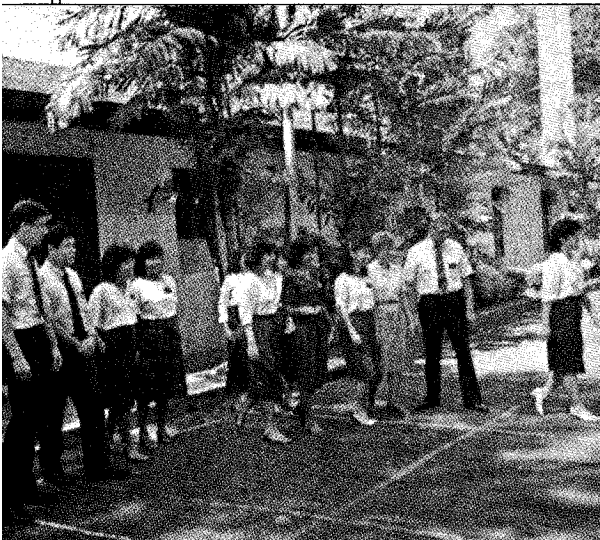
●中国語の聖典

な国に住み、数カ国語を理解することができる。ウィルコックス副会長にとってアジアは初めての経験であるが、習慣にもいち早くなじみ、意志疎通についても問題は感じていない。

しかし、キリスト教国で効果をあげた事柄が、同じようにアジアでも効果をあげるとは限らない。1800年代にアジアを訪れた最初の宣教師たちと同様、地域会長もこの問題に直面している。

「フィリピンを除き、宣教師たちは非キリスト教的な環境の中で伝道活動を行っています」と、ブラッドフォード会長は説明する。「キリスト教徒ではないにもかかわらず、アジアの人々の大半が神を信じています。しかし、神が人格を持つお方であり、実に私たちの造り主であって、文字どおり人類の父である、という考え方は持っていません。この理解がないために、私たちのメッセージを速やかに受け入れることがなかなかできないのです。ですから、アジアで真理を宣べ伝えるにあたっては、忍耐と大きな愛が必要になります。」

地域会長はアジア全域にわたって、主の業を着実に推し進めようとしている。ブラッドフォード会長は次のように話を結んだ。「アジアのほとんどの国では、熱心に、また一生懸命に働くこと自体が、最もよい伝道手段となります。過去の業績を称賛することに時間を費やすのではなく、努力することを通して、私たちの本当の姿を人々に知ってもらおうではありませんか。」



●（写真左）シンガポールの宣教師たち。シンガポール伝道部の宣教師の多くは、マレーシアとインドネシアから召されている

●（上）香港の末日聖徒

わせて、1万8,000人の求道者が宣教師からレッスンを受け、バプテスマの水をくぐった。

ディヤガー副会長は次のように語っている。「そうした宣教師の70パーセントはフィリピン人で、彼らは主を愛し、勇敢に神のみ業を推し進めています。彼らの献身的な働きによって、フィリピンに32ものステーク部が設立されたのです。」

フィリピンをはじめとするアジア諸国の急速な成長に対応して、教会は多くの新しい建物を建設し、数カ国語で教材を作製している。それを説明してくれたの

は、地域会長会の幹部書記を務めるウィリアム・シェイ長老である。

さらにブラッドフォード会長は次のように語っている。「アジアの教会員は真の意味での開拓者です。数知れぬ開拓者物語がこの地で生まれています。それらはいずれも、大きな犠牲を秘めた感動的で信仰を鼓舞する物語であり、アメリカの初期の開拓者たちが家を捨て、大平原を渡っていった物語さながらです。」

日本での伝道経験を持つブラッドフォード会長は、日本語を解す。オランダ生まれのディヤガー長老は、これまで様々



ジェリー・アバント撮影

## ハン・イン・サン 韓国教会員 の「宝」

モルモン経を韓国語（ハングル）に翻訳し、韓国人として最初の伝道部長を務めた

アジアのある国々では、特定の人々が「人間国宝」に指定される。彼らはその国の芸術的または文化的伝統に著しい貢献をしている人々である。

教会の中に「人間国宝」を指定する制度はないが、あるとすれば、ハン・イン・サン（47歳）こそ、それに値する人物である。

過去に地区代表を務め、現在は韓国における教会管理本部の地区マネージャーを務めるハン長老は、「一流」という言葉にふさわしい人である。

ハン長老は、韓国人初の専任宣教師として伝道に出、その間にモルモン経を韓国語（ハングル）に翻訳した。また、1975年から1978年までの間、韓国プサン伝道部で、これも韓国人として最初の伝道部長を務めた。

身長165センチの、物静かで控え目なハン長老は、自分自身を「逆境の中から遂に福音の幸福をつかんだ男」と言う。

朝鮮戦争の勃発した1950年、ハン長老は12歳であった。このときを境に、彼は辛苦の人生を歩んだ。

「あの頃のことは今思い出してもつらくなります。」ハン長老はそう語る。年端もいかない少年が、母親と7人の幼い弟や妹のために食糧と薪を集めてこなさなければならなかったのである。

「なぜ自分が韓国に生まれてきたのか、なぜこれほど困難な境遇の下に生まれたのか、私にはわかりませんでした。」ハン長老はそう語る。しかし、そのようなハン少年にも、人生の目的を見いだすときがやって来る。

「学生時代、私は学校で青少年赤十字団の委員長になりました。引き継ぎを行なった前任者の少年が末日聖徒だったのです。彼は私に教会を紹介し、MIAに連れていってくれました。当時は校舎の中で集会を行なっていたのです。1956年のことでした。

彼らはほかの人々とまったく違っていました。人生や幸福、永遠の家族について語っていました。それまで私が信じたことのないものばかりでした。以前私がドイツ語を習い始めたとき、最初に口に出して学んだ文が『空は青く、人生は美しい』というものでした。私は吹き出してしまいました。あまりにも馬鹿げていたからです。それは、飢えや貧困、寒さを知らない人々だけが話す言葉だ、と私は言いました。

しかし、福音を学んでから私の態度は変わりました。暗い夜や嵐の日であっても、人生は現に美しいのです。」

ハン・イン・サンは伝道に出たいという強い望みを持った。こうして彼は徴兵

のため兵役に服している間に、伝道の召しを受けたのである。27歳のときであった。

ハン長老は、韓国で3番目に大きい都市テグへ宣教師として赴任した。彼はこの地で伝道に励むかたわら、監督長老、支部長、セミナーの教師を務め、ほかの宣教師たちのために韓国語の教師もした。

「そうした責任すべてが重なって、体に無理が生じてきました」ハン長老は語る。「私は肝炎を患いました。当時肝炎は韓国人には珍しい病気でした。私は軍隊に2年半も在籍していましたが、病気にかかったことは一度もありませんでした。健康には自信があったし、跆拳道（韓国の護身術）では黒帯を持っていましたので、病気をしたことで非常に悩みました。

私は療養のためにソウルに送り返されました。モルモン経を韓国語に翻訳する責任はそのときに与えられたのです。翻訳の話が聞かされた私は、翻訳が終わったら自分の命も終わるだろうと思いました。ただその責任を果たすためにだけ、自分の生命は保たれているのだと思ったのです。私は「主よ、なぜ私を」と、つぶやいていました。周囲を見回せば、私よりはるかに能力のある人々が大勢いたからです。

しかし、私はその責任に取り組みました。私は終始病身のまま、翻訳をしました。お陰で、もともと大きくない体が12キロ近くもやせ、洋服は2回も仕立て直さなければならませんでした。

主は私に様々な才能と言葉を授けてくださいました。私が青年だった頃、韓国は日本に占領されていました。当時私はすでに日本語を話すことができました。ですから、だれか日本政府の役人と交渉の必要があるときは、いつも私が呼ばれました。

私は野心がわきあがってくるのを感じないわけにはいきませんでした。しかし、主は私を謙遜にさせてくださいました。病気が重くなると、私はひざまずき、自分の知識ではなく主に頼らなければならなかったのです。私の病気はそれ以上に悪くなることはありませんでしたが、翻



## チャーチニュース

訳が終わるまで快方に向かうこともありませんでした。」

ハン長老は、モルモン経の翻訳はそれまで取り組んだ仕事の中で最もむずかしいものであったと語っている。「しかし、それは特権であり、素晴らしい経験でも

ありました。」ハン長老はこう言い添えた。

伝道を終えてから、ハン長老はキュー・イン・イー姉妹と結ばれ、現在は5人の子供に恵まれている。「私は世界中で一番幸せな夫であり、父親です。私は自分の

家族に心から感謝しています。これほどすばらしい家族に恵まれたことに比べれば、モルモン経の翻訳でさえ、色あせたものに見えるほどです。」ハン長老はこう語った。

## 扶助協会 音楽コンテストの お知らせ

### 聖歌隊用の曲公募

中央扶助協会会長会は、全世界の姉妹たちを対象とした音楽コンテストを開催することを発表しました。このコンテストはエクルス音楽基金が後援します。  
注：応募作品は英語に翻訳し直す必要はありません。

#### 応募要項

1. 応募の締め切りは、1986年7月31日とします。(当日消印有効)
2. 応募作品は、福音にかなったものであり、扶助協会の聖歌隊用(斉唱、二部合唱、または三部合唱)としてふさわしいものに限りま。
3. 応募資格は、18歳以上のすべての末日聖徒の姉妹にあります。
4. 応募曲数はひとり1曲です。
5. 応募作品は返却しません。(必要な方は複写をしておいてください)
6. 応募作品には直接自分の氏名を記入しないでください。
7. 応募作品には次の文を記入した用紙を添付してください。「私は末日聖徒イエス・キリスト教会の会員です。この応募作品『○○○○』(題名を入れる)は、私が創作したものです。この作品は未発表で、このコンテストの結果が発表されるまで他の場所での公開の予定はありません。」この下に署名し、住所と電話番号



テレビ公開音楽番組「題名のない音楽会」のリハーサル風景より

を記入してください。

8. 受賞者には、音楽コンテスト委員会から1等に200ドル、2等に150ドル、3等に100ドルの賞金および副賞が贈られます。また該当者がいない場合は、授賞は見送られます。

9. 受賞者には1987年1月1日までに通知がなされます。それまでに通知がなければ、応募作品の他の場所での公開は自由です。

10. 受賞作品の著作権および出版権は教会が所有します。(これは教会の許可を前もって得る限り、原作者が他の場所で使用することを禁ずるものではありません) また委員会は必要に応じて作品を手直しすることがあります。

11. 応募作品にはピアノまたはオルガンの伴奏を入れてください。この場合編曲者の協力を受けることは認めません。

12. 応募作品は芸術的価値、家庭や教会での有用性、独創性、大衆性、簡易さ、

歌詞と曲との調和、簡潔さなどの観点から審査されます。特に家庭で用いるのにふさわしいものは、教会の定期刊行物の紙上で1、2ページにわたって掲載する予定ですので、簡潔さが強調されています。

13. 作品の応募には次の物が必要です。  
(1)国際版(280ミリ×216ミリ)またはA4版の用紙に清書した楽譜(歌詞含む)、  
(2)国際版またはA4版の用紙に清書した歌詞、  
(3)署名をした添付書(応募要項7参照)。共作の場合、双方の署名が必要です。なお、応募曲を録音したテープは必要ありません。

14. 歌詞と曲は著作権のないものに限りま。

15. 送付先：  
Relief Society Song Contest  
Church Music Division  
50 East North Temple Street  
Salt Lake City, Utah  
U.S.A. 84150



## 浅間玄也兄弟(前横浜ステークス部長), 地区代表に召される

していた田中健治長老が7年間務めた地区代表の責任を解かれた。

浅間玄也長老の担当は、東京地区(東京・東京南・東京西・町田・横浜ステークス部)、静岡地区(静岡ステークス部)である。これにより、東京地区と静岡地区を担当していた相良健一長老は、田中健治長老が受け持っていた札幌地区と仙台地区を担当することになる。

新たに召された浅間玄也長老は、これまでに副地方部長、監督、高等評議員、副ステークス部長、ステークス部長を歴任し、長年にわたり指導の立場にあつて責任を果たしてきた。現在、日網石油精製株式会社に勤務し、効率化推進プロジェクトチームのマネージャーの地位にある。

また妻の照子姉妹との間には2男2女が恵まれたが、長女の加奈子姉妹は、昨年名古屋伝道部専任宣教師としての任期を終えた。長男の大介兄弟は現在、南米チリのコンセプト伝道部で伝道中である。

浅間玄也長老は今回の新たな責任について次のような感想を述べている。「私は末日聖徒となってからこれまで、福音の中で生活することを楽しんできました。いろいろな経験をいたしました。いつも神様の導きを頂き、心の中に平安と満足感がありました。私は福音を心から愛しています。今は残された人生を神様と人々にお仕えして、自分を捨てて働いていきたいと願っております。」

**横** 浜ステークス部長として7年半にわたってその責任を務めてきた浅間玄也兄弟(51歳)が、2月10日、七十人第一定員会会員、アジア地域会長会第二副会長のキース・W・ウィルコックス長老によって地区代表に任命された。また翌日、札幌地区と仙台地区を担当

## 横浜ステークス部長会再組織される 新ステークス部長に田中靖也兄弟

**3**月9日、七十人第一定員会会員、アジア地域会長会第二副会長であるキース・W・ウィルコックス長老管理の下に、横浜ステークス部大会が開かれました。その席上、これまで7年間、ステークス部長としてその責任を果たしてこられた浅間玄也兄弟が先に地区代表に召されたことからステークス部長を解任となり、新たにステークス部長として田中靖也兄弟(写真中央、横浜第2ワード部)、第一副ステークス部長に佐倉井正彦兄弟(写真左、大船ワード部)、第二副ステークス部長に遠藤大兄弟(写真右、横浜第2ワード部)が召されました。

横浜ステークス部の目標は、前ステークス部長会の目標を引き継ぎ、3年後に横浜南ステークス部を、5年後に川崎ステークス部を設立することです。これを達成する

ために、

1. 会員伝道により、教会(福音)に関心のある人を紹介するリフェラルプログラムの継続
2. 伝道と直結した教会活動の実施
3. 会員による街頭伝道

の3項目をさらに推し進めていきます。そのほかの横浜ステークス部の神権役員は以下の通りです。能美知威(ステークス部幹部書記)、大山篤司(ステークス部書記)、長沢俊樹(ステークス部書記補助)、野田雄司、山口敏男、太田宜克、稲村利明、佐藤正温、芹沢正、鈴木清和、小川周一郎、小野塚昭三郎、西条誠司(ステークス部高等評議員)、小室敬(祝福師)、塩隆彦(横浜第1ワード部監督)、山新田治(横浜第2ワード部監督)、武田敏男(川崎ワード部監督)、把野小松(上大岡ワー



●新たに組織された横浜ステークス部長会

ド部監督)、岩波信夫(大船ワード部監督)、赤塚周(横浜中央支部長)、山下栄(小杉支部長)[敬称略](レポーター：横浜ステークス部幹部書記・能美知威)

## 各地のたより



# 「主が良いと 思うことを 行なわれる ように」

横浜ステークス部長  
田中 靖也

このたび私のようなものをステークス部長として支持して下さった会員の皆様に心より感謝しております。

私は大会の1週間前の日曜日あたりからサタンにとりつかれたようでした。こうささやく声が聞こえるのです。「あなたが今度のステークス部長です。」私は驚きましたが、すぐに打ち消しました。こんな高慢なささやきはきっとサタンに違いないと思いました。もっとふさわしい優秀な人が私たちのステークス部内におられるからです。しかし、月曜日、火曜日、水曜日とだんだんそのささやきが強くなってきました。苦しくなってきました。何とか逃れたいと思いました。

土曜日の大会の前日は浅間ステークス部長の最後の神権役員会があり、帰宅して入浴後に寝たのは12時頃でしたが、私は3時半頃突然サムエルの場が脳裏に浮かんで目が覚めました。それはサムエル記上第3章のところでした。

私は早速起きて、聖書と絵本の旧約聖書物語を出して読みました。この場面はサムエルが部屋で寝ていると主が「サムエルよ、サムエルよ」と呼ばれます。サムエルはエリが呼んだのだと思いエリの所へ行って、「あなたがお呼びになりました。わたしは、ここにおります」と言いますが、エリは呼ばないので「帰って寝なさい」と言います。サムエルは帰って

寝ます。これを3回繰り返します。最後に主はサムエルにエリの家について語られますが、エリはサムエルからそのことを聞いて言います。「それは主である。どうぞ主が、良いと思うことを行われるように。」

私はここを読んで祈りました。「どうぞ主が、良いと思われることをウィルコックス長老を通して行われるように」と。私はそのときから断食を始めました。

大会での話の準備をしていると夜が明け、家族が起きてきていつもの生活が始まりました。しかしまた、次のような声が聞こえました。「第一副ステークス部長は佐倉井兄弟、第二副ステークス部長は遠藤兄弟。」私は本当に参りました。自分の部屋に入り窓を開けて、ひざまずいて祈りました。「サタンよ出て行け。イエス・キリストのみ名によって命じる」と。こんなことをしたのは教会員になって初めてのことでした。恐ろしい考えですので、この思いから逃れたいと思いました。

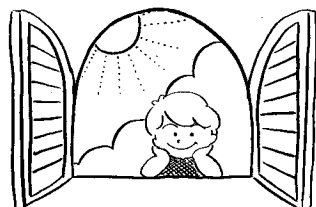
土曜日の朝9時からステークス部の神権役員と監督、支部長をひとりずつウィルコックス長老が面接されます。私は準備のため少し早くステークス部事務所へ行きましたので、ステークス部長室に入り祈りました。ここはウィルコックス長老が一人一人面接をして主が選ばれた新しいステークス部長を見いだすところです。「どう

ぞ主が、良いと思うことをウィルコックス長老を通して行なわれますように」と祈りました。

面接が始まりました。私は一番最初に受けました。そしてしばらくステークス部事務所にて、面接が順調に行なわれているのを見届けてから家に帰りました。午後になって浅間長老から電話があり、教会に行くとはかに3人の兄弟も来ていました。4人一緒に面接を受け、その後またひとりずつ面接を受けました。そして私が呼ばれ、主がステークス部長として召したのはあなたです、と言われました。私にはできませんと申しあげましたが、今までのことを考えると、「主が私にお命じになるのでしたら従います」と申しあげました。「副ステークス部長はあなたが召すのです。時間が必要でしたら差しあげます」と言われ、また「遠藤兄弟はあなたの義理のお兄さんですが、そのことにあまりとらわれないでください」と言われました。私はすぐに「第一副ステークス部長は佐倉井正彦兄弟、第二副ステークス部長は遠藤大兄弟」と申しあげました。

神様は不思議なことをなさいますが、今はただ教義と聖約にある「完全なるわが福音、弱き者たち単純なる者たちによりて世界のいやはてまでも宣べられ……んがためなり」(教義と聖約1:23)という聖句に慰められております。

私は人に誇ることは何もありませんが、田中健治長老がステークス部長であった頃に彼から受けた勧告に従って、ジョギングすること(もう15年以上続けている)、家族で朝6時30分に起きて、宣教師のためにお祈りすること、毎朝目標を唱和すること(今年の家族の目標は「信仰簡条」)、毎朝モルモン経を読むこと、これ



## 各地のたより

は水野家や武蔵野家に励まされて続けております。家族で続ける秘訣は、家長が忍耐することだと学びました。

土曜日の夜、家に帰ってから子供たちを集め、ステーキ部長に召されたことを伝えました。良くて悪くてもステーキ部長の子供として見られるようになることを伝え、申し訳なく思っていると言いました。しかしステーキ部長の子供だからといって正しくしようと思わないでほしいし、間違いをしてもかまわない。た

だお父さんの子供として、神様の子供として正しくあってほしいと思っていると伝えました。そして明日の大会で支持を受けるが、それまで秘密を守るように、秘密を知ると言いたくなる誘惑を受けるが、それを守るとは人間として当然やらなければならないことであると教えました。

日曜日の朝、子供が断食をすると言い出しました。私はなぜ断食をするのか尋ねますと、お父さんのためにするのだと

言うのです。私は前日断食をしたので、その日は断食をしないつもりでしたが、一緒に断食をすることにしました。本当に家族に感謝しています。

私は主が生きてましますこと、この福音が真実であること、末日聖徒イエス・キリスト教会が唯一まことの教会であることを証します。イエス・キリストのみ名により申しあげます。アーメン。〔3月9日(日)、横浜ステーキ部大会「一般大会」のお話から〕

## テレビ公開音楽番組 「題名のない音楽会」に出演して



●東京交響楽団の演奏とケント・ギルバート兄弟のオルガン伴奏に  
合わせて讃美歌「恐れず来れ聖徒」を歌う東京地区の兄弟姉妹

レポーター：柳田聡子(東京南ステーキ部大岡山ワード部)

2月2日、東京南ステーキ部の有泉芳彦高等評議員から、「ケント・ギルバート兄弟が出演するテレビ番組に聖歌隊が出るようになったから、来週練習に集まるように」との連絡があり、また監督からもその旨の発表がありました。

末日聖徒の代表的な讃美歌である「恐れず来れ聖徒」の曲をタバナクル聖歌隊の編曲で歌うのです。オーケストラ用の楽譜がないので、編曲は違いますがフィラデルフィア交響楽団が伴奏したテープと聖歌隊用の楽譜をテレビ朝日の方に預ければ、オーケストラの方が楽団のため

に採譜してくださるとのことでした。そこで2月9日夜、テレビ局の方が私たちの第1回目の練習を見に来られたとき、それらをお預けしました。

東京南ステーキ部だけでは人数も少ないので、ほかのステーキ部にも連絡、応援をお願いしましたところ、横浜ステーキ部、東京ステーキ部からも来てくれました。練習や発表が平日の昼間や夜なので、参加を希望しても集まらない会員も多かったと思います。

放送時間の都合で1、2、4番の編曲を使って、歌詞は1、3、4番を歌うこ

とになりました。それにしても急な話で、9日の夜、パート練習と音合わせ、12日はオーケストラとの音合わせ、14日本番というスケジュールでしたので、11日の建国記念日は休日返上で、もう一度渋谷ワード部に集まって練習をしました。12日は東京交響楽団の練習場でオーケストラに合わせての練習です。しかし午後7時から9時までと聞いていた合同練習も、実際に楽団と合わせて歌ったのは2回だけで、もうよろしいと言われたときには拍子抜けし、早く帰途に就きました。それでもこのときは、大勢のオーケストラ

## 各地のたより

の団員が、彼らにとって初めてと思える私たちの讃美歌を、各々の楽器で聖歌隊に合わせて演奏して下さったのには、つくづく感心させられました。9日夜に渡された楽譜が12日にはもうすべての団員の譜面台に載せられ、私たちの希望も入れて指揮者福村芳一氏がまとめてくださったのです。さすがにプロの技術と敬服しました。

さて2月14日、東京・五反田簡易保険ホールでテレビ公開音楽番組の録画撮り本番です。ケント・ギルバート兄弟は今や本業の弁護士より、テレビタレントとして有名になっています。司会者、音楽家の黛敏郎氏と彼の対談の間に私たち末日聖徒が歌うのです。ギルバート兄弟がかつて宣教師であったことや、この教会の概要についても全国ネットで放映されますので、会員一人一人のマナーも教会の評価につながると緊張しました。練習の最初から指揮を務めてくださった野田姉妹のご指導や有泉兄弟の提言による、急ごしらえの私たちですが、楽屋で全員ひざまずき、この機会が主の光を表わすものとなるように心をひとつにしてお祈りしました。

さて、本番の舞台に立ってみると、会場は満員の盛況でした。皆精いっぱいそ

れまでの注意を思い出しながら歌いました。3分足らずの合唱でしたが、入場券をあげた友人に、合唱の歌詞がオーケストラに負けて聞こえなかったのではないかと尋ねたところ「よくわかったし、良かったですよ」との評でした。

この経験を通して主のみ業を改めて感じることができました。ギルバート兄弟はタレントとして活躍しておられますが、末日聖徒を代表するひとりとして、伝道を常に忘れず、教会紹介の機会をステーク部の会員に回して下さったことに感謝しています。練習時間があまりないので、これまで聖歌隊員として経験のある

比較的近くにいる会員に声をかけました。緑の下の力持ちとして有泉兄弟姉妹や、わざわざ大船から来られた野田姉妹が時間と労力を惜しまず奉仕して下さり、また幼児を持つ会員のために姉妹たちが楽屋にまでベビーシッターとして手伝いに来て下さったりと、皆が一致してお祈りしたことも含め、すべてが主の祝福を受ける道となったことと思います。

3月16日(日)の午前9時から9時半まで放映されたこの「題名のない音楽会」(テレビ朝日系)の番組が伝道の一助となるように祈念してやみません。(やなぎだ・としこ)



●教会の紹介を行なう司会者の黛敏郎氏(東京・五反田簡易保険ホールで)

## 第6回名古屋ステーク部 スキーツアーに50人が参加

ステーク部のスキーツアーも今回で6回目、すっかり恒例になりました。年によって異なりますが、毎年2日ないし3日間のスケジュールでステーク部活動委員会がスキー場へバスを走らせています。お陰で、当ステーク部のスキー人口は札幌の2ステーク部に次いで多いのではないのでしょうか。

今年2月10日から1泊2日で岐阜県丹生川村朴の木平スキー場へ行きました。過去には子供連れの家族の参加が多かった年もありますが、今回は申し込みが殺到して、大人だけでバス(50人乗り)が

いっぱいになってしまいました。というのも、当ステーク部のスキーは例年親切丁寧なスキースクールが開かれるのですが、そのうえ今回は温泉に宿泊するからです。

10日未明、ステーク部センター(名東ワード部)に集合したあと「寒い、寒い」と言いながらバスを待ちます。やっと来た観光バスに乗り込んで、気持ちよく揺られている間に、周りが明るいので目を覚ますと、もうゲレンデです。現金なもので、スキー場に着いたら、もう「寒い」と言う人はいません。朝食、開会のセレ

モニーのあと、スクールのクラス分けです。受講希望者のうち約半数は「こんなにたくさんの雪を見るのは初めて」という有様ですから、スキーの装着から文字どおり「手取り、足取り」教えました。

技能別に「初心」「初級」「中級」の3クラスを開設し、6人のスペシャリストが午前と午後それぞれ2時間ずつ指導します。残りの時間は、各自で教えられたことを何度も反復練習するのです。だれでも必ず滑れるようになって帰ります。ブロードヘッド伝道部長のふたりのお子さんたちも参加して下さり、言葉はよく通じませんが、教える内容はよくわかってもらえたようで、上手に滑れるようになりました。

その夜の宿は、スキー場からバスで40分ほどの所にある平湯温泉です。大きな

## 各地のたより

岩風呂があって、のんびり肩までつかっていると、体が芯まで温まってきました。勇敢な男性3人は、雪の中を露天風呂へ入りに行ったと、後で聞きました。

夕食後は大広間でゲームです。ゲレンデでは50人が一同に会して何かをすることはありませんし、2メートル近いスキーを付けてはお互いに近寄ることもありません。ゲームとなると、十分にスキンシップができます。9人のお友達も、伝道部長のお子さんも一緒になって大いに騒ぎました。

スキーツアー——特にアフタースキーの時間——が縁になって結婚に「滑り込んだ」カップルが過去に何組かありました。(かく申す私もそのひと組です) 今回もそのようなことが起きれば、うれしいのですが……。

翌11日も、天候に恵まれて自由滑降を楽しみました。昨日は転んでもひとりて起きあがれなかった人が、歓声をあげながら滑り降りてくるのを見るのは、実に楽しいものです。

「初日は靴も板も重くて、つらくて、何もおもしろいことはなかった。2日目になってやっと楽しくなったと思ったら、すぐに終わっちゃった」と橋本悦子姉妹(春日井支部)が言うように、あつとい

う間に帰る時間が来てしまいました。

教会外の方々も、それぞれ楽しんでくださったようです。私も長年のスキー仲間にも誘われても、安息日の問題でなかなか付き合えなかったのですが、今回私の方からスキーに誘って「借り」を返すことができました。彼らは私に「おもしろかったから来年も連れていってくれよ」と言ってくれました。

来年はもっと長期でやろう、スクールのゼッケンを作ろうとか、バスを2台い

っぱいにしようとか、将来は公認のスクールにしてバッジテスト(検定試験)を独自でできるようにしたいなど、夢をいろいろと膨らませています。

岡崎ワード部と刈谷支部を中心とする実行委員の皆さん、多くの犠牲を払いながら奉仕して下さったスペシャリストの皆さん、ありがとうございました。

(レポーター:名古屋ステーク部体育ディレクター・伊藤好文)

●名古屋ステーク部スキーツアー



## 大阪堺ステーク部青少年による「第1回フレンドシップ・カンファレンス」開かる

特別に参加してくれたのは、本当にうれしいことでした。

セミナー第1部では、「デートの標準」について講師の尾崎兄弟と小松姉妹のお話、堺ワード部の青少年によるデートの寸劇があり、恥ずかしさの中にも笑いや真剣な表情も見られました。

続いてセミナー第2部では「聖典をいかにしてよく学び実行できるか」のテーマで、セミナー(大阪)地区指導主事の中野政信兄弟のお話を伺いました。中野指導主事は、私たちが目標に向かって前進するとき、①想像力②熱意③はつきりと口に出して言うこと④決してあきらめないことの4つが大切であると教えて下さいました。このセミナーを通して、私たちが目標を達成できるかどうかは才能や能力によるのではなく、努力次第で

**去**る2月11日、「歩もう主の道、信頼の輪」をテーマに、大阪堺ステーク部主催の第1回フレンドシップ・カンファレンス'86)が和歌山ワード部を会場に開かれました。

「青少年のためのプログラムを！」という熱い声がステーク部を動かし、7人の青少年から成る企画委員会が組織されました。

「心をつくして主に信頼せよ、自分の知識にたよってはならない。すべての道で主を認めよ、そうすれば、主はあなた

の道をまっすぐにされる)(箴言3:5-6)のテーマ聖句の下に企画委員会は何度も会合を重ね、各ワード部、支部の実行委員にプログラムの計画、司会など細部を分担、計画してもらいました。

さて当日は寒風の吹く中、早朝にもかかわらず、会場の和歌山ワード部に指導者の車に分乗した仲間が集まり始めました。最初のプログラム、自己紹介の始まる8時20分には、出席予定者28人全員が元気に顔をそろえました。特に大阪伝道部直轄支部の田辺支部から3人の仲間が

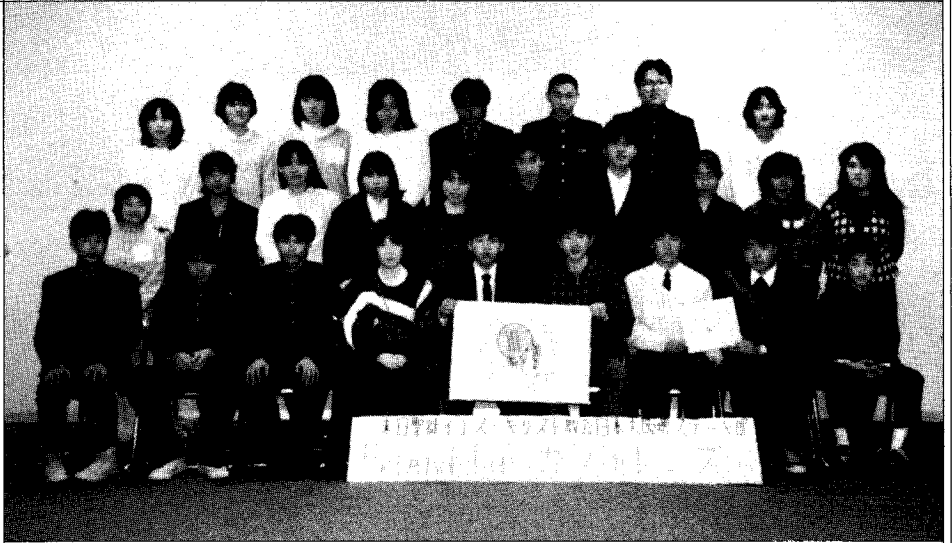
## 各地のたより

あることを学びました。

プログラムが進むにつれて友達の輪も広がり、次第に活気を帯びてきました。昼食後、会場を和歌山城に移し、城を背後にドッチボール、レターゲーム、探偵ゲーム、花いちもんめなどを行ないました。幼いときにだれもが経験したと思われる花いちもんめを、周囲の人が見ている中で恥ずかしそうにしながらも楽しんだことが、とっても印象的でした。寒いながらも元気に楽しく、青少年らしく遊んだ時間です。

次のタレントショーでは、マスター聖句探し、料理講座、ピアノ演奏など、個人の才能や個性が十分に発揮され、驚きの声や笑いの声が部屋中に響きわたっていました。予定の時間を過ぎ、最後の証会に移るときには、すでに外は暗くなり始め、「あっという間に終わってしまったなあ」とか「もっと遊びたかった」という声が聞かれました。

締めくくりの証会は、お休み会員、求道者を誘うときに苦勞したことや共に参加することができた喜びを述べる人、またこの大会で得た証や決意を表明する兄弟姉妹、そしてその証や決意に熱心に耳を傾ける兄弟姉妹により、みたまに満ちたものとなり、靈的な雰囲気であ



●大阪堺ステーキ部のフレンドシップ・カンファレンスに参加した青少年28人

ばいでした。

このプログラムを通して「青少年の輪を広げ、兄弟姉妹の交流を深めると同時に、その信仰を強く大きくする」という目標が、参加者一人一人の楽しんでいる光景を思い出すとき、十分達成することができたと確信しています。今大会はまさに参加者全員が心をひとつにし、精神をひとつにしてつくりあげたものであり、何かひとつのことを一致団結して行なうことのすばらしさをだれもが感じたこと

でしょう。

計画から実行までいろいろとアドバイスしてくださった光川第二副ステーキ部長をはじめ、青少年の数を上回る多くの指導者の方々の出席に感謝しています。

友達同士の愛、指導者の愛、そして神様の愛を改めて感じさせられた1日であり、「仲間」「同胞」という意識が高まり、友情が育まれたユースカンファレンスでした。(レポーター：大阪堺ステーキ部ユースカンファレンス企画委員長・和田信一)

## いのち 生命の光の中に 生きよう



仙台ステーキ部  
古川支部  
鈴木 光枝

神様はご自分を無視するものと闘っておいてになるということ、この頃しきりに感じるようになりました。

いつでもどんなときでも、父なる神に従ったとき、愛を深く感じる事ができます。そしてどんなものにも涙をもって喜びを感じることが出来ます。何とも言い知れぬ、他人にはわからない喜びと感激を知ることが出来ます。祈りのときの楽しさ……。こんなにも祈りが楽しいものであったかと、しきりに感激の思いがわきあがってくるのです。

アダムと神が直接話されたように、私たちは祈りを通して、また自由意志を通して善悪をわきまえ、行動することができます。私は弱者ですから、ときどき神様を無視してしまいます。あの卑しい自分、利己的な私。ああ、「言ひ難き嘆きをもったとりなしの主」が共に悲しんでおられる。ああ、暗黒の手さぐりの迷いはもうたくさん。……

「言ひ難き嘆きをもった主」の保護の下に生きよう。生命の光の中に生きよう。主は他人にはわからない方法、すなわち私たちの内部に入り込んで、すべてを理解し、励まし、慰め、関心を持ち、教育し、愛をもって忍耐し育ててください。私もほかの人の中に入り込んで理解し、関心をもっともって持つて天父のようになりたい。

(すずき・みつえ 1949年生まれ)



## 結婚—— 私はこうして 伴侶を 決めました

高松ステーキ部高知ワード部  
藤田 節子

高知の地に宣教師が遣わされて4カ月後の1969年、28歳のときにバプテスマを受けました。結婚は神様の戒めのひとつですけれども、伝道所で第1番目の、しかも適齢期を過ぎて改宗した姉妹にとって、結婚相手を見つけることは、とてもむずかしいことでした。

当時の地方部長さんは「教会で活発に働いている姉妹には神様の助けがあります。現にあなたの名前は地方部長会ではいつもあげられています。しかしもうひとつ大切なことは、ほかの支部を訪問したり、大会や特別プログラムに参加するなどして、あなた自身も相手を見つける努力をしなければなりません」と言われました。

バプテスマを受けた年の夏、神戸の六甲で開かれたMIA（独身成人プログラムの前身）カンファレンスに参加したのを皮切りに、大阪や神戸で開かれる近畿・四国地方部大会、日本中央伝道部大会、加えてYWMI A キャンプなどにも積極的に参加するようにしました。

振り返ってみますと、改宗した当初は、いろいろな事情から教会外の人ともお見合いをして、相手を改宗させてから結婚することも考えていました。その中のひとつに、家柄も学歴もよいキャプテンパイロットのお見合いがあります。

席上で、週3回の教会出席と知恵の言葉を守ることを快く認めてくださったので、彼もやがてはモルモンになるだろうと安易に考えていました。

その当時のことを次のように記録しています。「私は母に、今度は結婚するつもりだと話した。数日後、仲人さんから電話があった。教会に行くのはよいが、お酒が飲めないと親戚づき合いがうまくいかない。もしそれを取り消さなければ、この話はそちらから断わってもらいたいと。

今までに何度かお見合いをしたけれども、このように条件の整った人は初めてだ。この人こそが神様から与えられた相手だと思っていた。だから次の日から断食を始めた。本当に主が与えられた結婚だったらきつと結ばれると思った。しかし断食を始めて間もなく、職場で貧血を起こした。大分気分が良くなって、断食を続けようか何か飲もうかと迷っていたとき、『この断食はもう続ける必要がありません』という声を感じた。この結婚は主が望まれる結婚ではないとわかった。私は帰宅するとすぐ母に、この話を断わってほしいと頼んだ。母は私と教会のことを理解してくれていたので『残念ね』と言っただけであった。

『私は主の戒めの方を選びました。だからその責任は主にあります。どうぞ彼よりもすばらしい人を私に与えてください。』主の力を理解せぬ私は、あんなに条件のよい相手はいくら神様でも探し出すことはできないだろうと疑いながらもたびたび祈った。」

私は結婚相手を選ぶとき、次のふたつのことを心に留めていました。

1. 神権会に出席している活発な末日聖徒であること。

2. ジョージ・Q・モリス長老のお母さんの言葉「あなたがある女性に会ったとき、最善を尽くして立派な人間になろうという気持ちを起こさせてくれる女性であれば愛する価値のある人、あなたの心に愛を目覚めさせる資格のある人です」（「結婚」p.45）を男性に置き換えて。

1972年7月、地方部のYWMI A 会長の責任に召され、高松でひとりアパート生活を始めたとき、それよりも少し前に西ノ宮に建築宣教師として召された高知の兄弟に、専任宣教師がしているのと同じように、毎週1回手紙を書こうと決めました。同じく故郷を離れた者として、励ましてあげたかったのです。そして書き続けていました。

高知で彼と私はそれぞれYM・YWMI Aの会長として一緒に働いた経験があります。また、あまり活発ではない会員を訪問したり、教会員の依頼を受けてその非教会員の家族を訪問したり、また、大阪で開かれた特別集會に出席するなど、行動を共にする機会もたびたびありました。それらを通して、彼が私の持っているもの、赦しと奉仕の精神を持っていることを知り、私もそのように自分を高めたいと思いました。そして彼の近くにいるならば、訓練され、成長できると思いましたが、年齢が10歳ほど若い彼との結婚は、想像も及ばないことでした。

しかし、私の土佐弁で書かれた手紙は、西ノ宮、金沢と、転勤する彼の後を追いました。故郷を離れて週1回の手紙のやりとりは、お互いをだんだんと身近に感じさせるものとなりました。また彼が神様から力を受けていることも感じられました。

ある日、手紙で結婚の申し込みがありました。常に心に留めていたふたつの条





## 各地のたより

件を彼は満たしていました。年齢の差には不安がありましたが、何よりもこの結婚には神様がかわかってくださると強く感じましたので地方部長に相談しました。彼はまだ建築宣教師の召しを遂行中でしたので、伝道部長さんの承認を得てお互いに結婚の約束をしました。そして彼の帰還後、1974年8月に私たちは結婚し、同月ハワイ神殿で結び固めを受けたのでした。

結婚当初は生活が厳しく、指導者のお話をまねて、土手に食用の草を探しに行こうと考えたこともありました。当時の記録には「家族の祈りで和雄（主人の名前）兄弟は、貧しき建築宣教師時代、目の前の少量の食物を、食べ盛りの同僚たちと共に必死の思いで『祝福してください！』と祈ったことを思い出しながら、残り少なくなった生活費のことを考え、どうぞ生活がちゃんとやっていきますようにと祈った」とあります。そんな中でも、支部の新会員や家族を迎えて食事会も開くことができました。不思議です。

現在主人は監督として、その責任に励み、息子は10歳になりました。私の母は1昨年69歳でバプテスマを受け、現在扶助協会の母親教育の教師と書記をしています。日曜日には4人そろって教会に行けることを本当にうれしく思います。

結婚の記録の最後には次のように記しています。

「今私は幸福な結婚生活をしている。本当の幸福が何であるかがだんだんとわかるようになった。私たちの結婚に主が実にかかわってくださっていることをはっきりと知っている。もし、主のみこころではない結婚をしていたら、今主に対してどのような恐れのお持ちがあるだろう。死に近きときには何を思うだろう。今は何の心配もない。福音を受け入れた者として雄々しくなければと思う。」

主は私たちを愛し、一人一人を心にかけてくださっています。主がどのようなことを勧告されているかを学び、常に心に留め、その勧告に従うときにのみ完全な進歩と喜びが得られることを私は知っています。（ふじた・せつこ 1941年生まれ、高知ワード部日曜学校教師）

## 伝道中の体験から 家出した少女の改宗



●神戸伝道部の宣教師たち  
ふたり目が滝野由理姉妹  
(前列左から)

東京北ステーク部浦和ワード部  
元神戸伝道部専任宣教師  
滝野 由理

**新** 約聖書の中に次のような聖句があります。「しかるに、神は感謝すべきな。神はいつもわたしたちをキリストの凱旋に伴い行き、わたしたちをとおしてキリストを知る知識のかおりを、至る所に放って下さるのである。わたしたちは、救われる者にとっても滅びる者にとっても、神に対するキリストのかおりである。」(IIコリント2:14-15)

伝道中に私はこのことを強く心に感じました。キリストの証し人として、また代表者として、1年半特別に奉仕する機会がありましたことを心から感謝しています。伝道期間中たくさんの方々にお会いし、私たちの生活に幸福と平安をもたらすイエス・キリストの福音を宣べ伝えてきました。一人一人との出会いは決して偶然ではなく、私自身の霊の目を開かせ、信仰を深めるうえで大きな助けとなっています。伝道中に得た多くの霊的な経験のひとつを特にご紹介したいと思います。

昨年の9月のことでした。その日は朝から宣教師のゾーン大会があり、午前中、宣教師たちの話し合いが持たれました。そのときなぜか、食事を取らずにそのま

ま伝道したいという強い思いがわき起こってきたのです。

私は同僚に「少し伝道しようか」と言って駅の方に向かいました。街頭伝道をしてしばらくすると、ひとりの女の子が向こうから歩いて来るのが見えました。その女の子に「私たちはイエス・キリスト教会の宣教師ですが、教会に興味はありませんか？」と尋ねました。しかし、彼女は「全然興味はない」と言いました。「それでは今までに自分はどのように生きていて、死んだあとどうなるのか考えたことはありますか？」と尋ねると「それはいつも考えていて、今も考えている」という返事でした。

そのときの彼女の目がキラキラと輝いていたのを今もはっきりと覚えています。彼女と話したい、福音を分かち合いたいと心から思いました。それで「私たちは、あなたと是非話したいので10分だけ時間をいただけませんか」と聞くと、「私は姫路の者ではないんです。実は家出してここに来ているの」と言いました。その答えにびっくりしてしまい、私はとっさに、食事は済ませたのかと尋ねていました。まだ何も食べていないということ

## 各地のたより

でしたので、一緒に食事をとりながら、なぜ家出したのか尋ねました。

彼女の答えは、学校に行きたくない、いじめられるということでした。「それについてお父さんやお母さんは何て言うてるの?」と聞くと、「両親は全然わかってくれない。ただ、我慢しろと言うだけで家にいたら学校に行かせられるから家出した」と言うのです。

彼女の心は傷つき、自分はどうなってもいいという投げやりな気持ちになっていました。しかし、それと同時に、その境遇から心が謙遜になっていたので、彼女にはイエス・キリストの福音を聞き、受け入れる備えができていました。本当に自然に「神様はいるの? 私たちを守ってくれるのかな?」と私たちに問いかけてきたのです。

私たちは心から証し、そのあと求道者の方とお会いする約束がありましたので、彼女と一緒に教会に向かいました。そして、求道者の方も含め、4人でモルモン経のモロナイ書第7章を読み、イエス・キリストの純粋な愛について学びました。そのとき、彼女は本当に真剣な表情で、その愛の定義について尋ねてきました。「永く堪え忍ぶとはどういうこと? 親切とは? ねたまず誇らないとは? ……」というように。その後、彼女はどうしてもその日1日家には帰りたくないと言いました。そこで伝道部長にお話すると、「ご両親に連絡して1日だけホテルに泊めて、次の日の朝、一緒に家まで送り届けなさい」ということでした。彼女に家に電話をさせ、私たちの住んでいるアパートのすぐ近くのホテルに泊ませました。

次の日の朝、私たちは3人で一緒に彼女の家に向かいました。その途中で大阪の教会に寄り、その宣教師に彼女を紹介しました。ちょうど神戸伝道部の管轄区域内だったので。

それから、彼女は抱えていた多くの問題を克服して、3カ月後にバプテスマを受けました。母親もバプテスマ会に出席してくださったと聞いています。初めて会ったときは泣きながら、もう死んでもいいと言っていた彼女は、今、元気に学

校に通い、高校に行くために頑張っているのです。福音によって、彼女は希望と生きる喜びを感じることができたのです。

イエス様に私たちが心向けるとき、平安が得られることを証します。世の中がたとえどのような状態にあっても、イエス様に従って生きるときに、心からの喜びと安らぎが得られるのです。神様は確かに生きておられます。私たちが愛し

てくださるがゆえに天父がイエス様をこの世に送ってくださったこと、またイエス様があらゆる試練に打ち勝ち、私たちの罪を背負ってくださることを心から証します。(たきの・ゆり 1962年生まれ、浦和ワード部独身成人プログラム扶助協会代表)



## 高崎ステーキ部 宇都宮支部教会堂の 完成に寄せて

敷地面積：  
549.27㎡  
建築面積：  
198.42㎡  
延床面積：  
554.52㎡



**力** 必達。(力つとむれば、必ず達す)私の出身校の柔道場の壁に掲げられている文字です。宇都宮支部のこの十数年の歩みを振り返りますと、まさにこの言葉がびったりくるような気がします。宇都宮支部にとって教会堂建築は、10

年も前からの現実的な目標であり、決して遠い存在ではなく、むしろ手を伸ばせばすぐに届く、とても身近な所にあったように思われます。

しかし、この手の届きそうなものが見えづからか、見えていて遠い蜃気楼しんきろうのよう

# 各地のたより

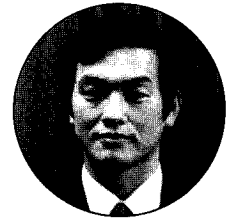
に感じられ、何年かの苦しい時を過ごしました。今思えば、祝福を前に荒野をさまよったイスラエルのように主の試しがあったのではと感じています。いろいろなことがありました。それでも、これらの経験を通して信仰と希望、真理と祈り

により、主の愛と祝福を知ることができました。

私が支部長として、この新教会堂建築の日を迎えることができましたのも、歴代の支部長をはじめとする多くの指導者がまかれた種から得た実を刈り取ったに

過ぎないのだと思っています。

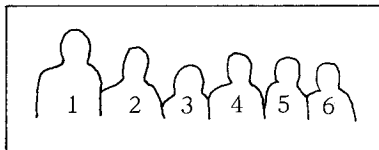
そして今、私たちは新たな気持ちで、この地に確固としたシオンを建設すべく、主への感謝を胸にさらに前進しようと決意しています。(宇都宮支部支部長・田代富夫)



田代富夫支部長

●宇都宮支部所在地：〒320 栃木県宇都宮市幸町9-2 TEL. 0286(32)0294

## 2月に召された JMTC 第81期生 6名の名簿



S: ステーキ部, W: ワード部  
B: 支部, M: 伝道部



〈名前〉	〈出身地〉	〈伝道地〉	〈名前〉	〈出身地〉	〈伝道地〉
1. 伊藤一秀	高崎S/宇都宮B	仙台伝道部	4. 西田里美	大阪北S/大津B	岡山伝道部
2. 佐野伸一	横浜S/上大岡W	仙台伝道部	5. 黒木美和子	福岡M/佐世保B	名古屋伝道部
3. 伊藤紀美子	大阪北S/城陽B	札幌伝道部	6. 大湊節子	仙台M/八戸B	神戸伝道部

## 読者のひろば

●本誌3月号でご紹介したシー・ピーターソン兄弟への励ましのお便りのあて先  
 Attention: Si Peterson  
 International Magazine  
 50 East North Temple Street  
 Salt Lake City, Utah 84150 U.S.A.

### シー・ピーターソン兄弟の信仰に胸を打たれました

「わたしの子よ  
 主の訓練を軽んじてはいけません。  
 主に責められるとき、弱り果ててはならない。  
 主は愛する者を訓練し、  
 受け入れるすべての子を、  
 むち打たれるのである。」  
 (ヘブル12:5-6)

「聖徒の道」3月号に掲載されたシー・ピーターソン兄弟の生き方は、まさにこの聖句の模範を示しています。この記事を読まれた多くの教会員の方々が、彼の強い意志と、ゆるがぬ信仰に胸を打たれたことと思います。実は、私の心の中に「証したい」という気持ちが芽ばえたのも、彼のあまりにも強い信仰に心を動かされたからにはほかなりません。

事故のために、運動機能がまったく麻痺状態になり、声も出ず、見ること、聞

くこと、考えること、そして唇を動かすこと以外は何もできないという障害を負わされたにもかかわらず、彼の神への信仰は以前にも増してさらに強まり、このような苦しい立場に置かれたことに対して一言も不満を漏らしたりはしませんでした。「私の身に起こった事故は、天父が私のために用意してくださった計画の中で、特別な目的があったと確信しています」という言葉の中にも見られるように、彼は神から与えられた試練を素直に受け入れているのです。その性格はとてもユニークで、明るく、その顔はほほえみを忘れず、とても障害者とは思えないほどです。たとえ彼の肉体が重く苦しい障害を負っていても、彼の心の中にはいつも神の愛と希望の光が満ちあふれているのです。

彼がこのような耐えがたい苦難に耐え、希望を持って生きることによって、私たちに模範を示してくださったのも、「神の愛」を信じる強い信仰から生まれたのです。

人間を、これほど強い者に変えること

ができるのは、「神の愛」とそれを信じる「信仰」以外にないと私は確信しています。

もし、私たちが「神の愛」を信じないならば、私たちは墮落した弱い人間になっていくでしょう。イエス・キリストは、その尊い命を犠牲になさるほど私たちを愛してくださいました。彼はその死によって私たちに「神の愛」を証明したのです。これとは逆にシー・ピーターソン兄弟はその障害に耐えて生きることによって、私たちに「神の愛」を証明しているのです。

モルモン経の中でも「神の愛」が証明されています。モルモン経によって、私は「神の愛」を知ることができました。神様が、宣教師をお導きくださって、私にモルモン経というすばらしいメッセージをくださったことに心から感謝申し上げます。

モルモン経は「神の愛のメッセージ」であり、私たちにとって最高の宝です。  
 (羽当満江 1963年生まれ、東京北ステーク部浦和ワード部)

### 編集室から

▶「聖徒の道」の原稿を常時募集しています。各地のたよりには北は北海道から南は沖縄までの幅広い話題を採りあげたく思いますので、広報ディレクターあるいは各種催し物を担当する高等評議員/地方部評議員の方はレポーターを手配して下さるようお願いいたします。

▶7月号掲載分の締切は5月9日(必着)です。投稿には必ず連絡先(電話番号)を記入してください。文章を一部手直しすることがあります。

▶あて先: 〒106東京都港区南麻布5-10-30 末日聖徒イエス・キリスト教会「聖徒の道」編集室 ☎03(444)5264



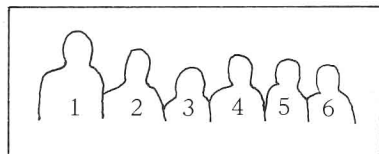
### 渋谷ブックセンターから

プライマリーへ行こう 新発売 2,000円  
 フィルムストリップキット(ガイド付, ケース入) 時間: 17分

初等協会では何をしているのか、また初等協会は子供たちが福音の原則を学ぶのをどのように助けるのか、初等協会に行くとなぜ子供たちが天父を愛し、教会に行くことを楽しみにするようになるのかを説明している。初等協会の指導者・教師のために制作されたものであるが、教会員・非教会員の両親に初等協会を紹介するためにも役立つ。



## ②月に召された JMTC 第81期生 6名の名簿



S: ステーキ部, W: ワード部  
B: 支部, M: 伝道部



〈名前〉	〈出身地〉	〈伝道地〉	〈名前〉	〈出身地〉	〈伝道地〉
1. 伊藤一秀	高崎S/宇都宮B	仙台伝道部	4. 西田里美	大阪北S/大津B	岡山伝道部
2. 佐野伸一	横浜S/上大岡W	仙台伝道部	5. 黒木美和子	福岡M/佐世保B	名古屋伝道部
3. 伊藤紀美子	大阪北S/城陽B	札幌伝道部	6. 大湊節子	仙台M/八戸B	神戸伝道部